

佐倉と江戸

——近世の瓦質・土師質土器からみた地域性——

藤 尾 慎一郎

- | | |
|------------|---------------|
| 1. はじめに | 4. 佐倉城出土焙烙の特徴 |
| 2. 焙烙研究の現状 | 5. おわりに |
| 3. 焙烙の諸属性 | |

論文要旨

考古学からみた江戸は市中を中心に進んだ発掘調査によって全貌が徐々に明らかにされつつある。特に焼物をつかって江戸市民の暮らしの復原や武家と町民の比較研究も盛んである。江戸時代の焼物には広域にわたって流通する陶磁器と各地で生産された素焼・瓦質の土器があるが、何を解きあかそうとするかによって資料として選ぶ焼物の種類は変わってくる。今回は江戸時代最大の消費都市である江戸とその周辺に位置する譜代大名の城下町の違いを日常生活のレベルからおさえるために、ゴマやマメを炒る土器である焙烙ばいろくを用いて迫ってみたものである。焙烙は底部がきわめて薄くつくられているため、長距離の運搬には向かず、広域流通には不適な土器と考えられるところから、各地でつくられその商圈は非常に狭かったといわれている。したがって焙烙にみられる地域色を追求すれば、その商圈の範囲をおさえることができるし、各地の生活レベルや囲炉裏や竈といった火力施設にあった焙烙がつくられていたと予想されるため、当時の各地の生活の実態を探るうえでも有効な遺物であるといえよう。

分析の結果、江戸市中に比べて佐倉では囲炉裏から竈への転換がかなり遅れたことや、江戸とその周辺に中世からつながる工人集団と17世紀に関西から招聘されたとされる関西系工人が存在し、両者が消費のニーズにあわせてしのぎを削っていた状況があきらかとなった。しかし絶対数が多い在地系工人主体の生産がここ佐倉では大勢を占めていたのである。また彼らと歴史上の下総土器作り集団との関連も注目される。江戸時代の煮沸具にみられる地域差が当時の生活状態を反映していたことは、筆者の専門である縄文・弥生時代の生活実態にもつながるものとして大いに期待できる分野である。

1. はじめに

近世の遺跡から出土する焼物のなかに広域流通する磁器・陶器に比べると地味な存在ではあるが、瓦質・土師質のいわゆる土ものと呼ばれる土器がある。陶磁器の研究は、美術史における研究の歴史も長くその成果も膨大だが、生産地の窯の発掘資料を対象にした、近年の考古学的手法による研究にはめざましいものがある。とくに型式学を駆使した資料分析が肥前磁器や瀬戸・美濃の陶器に対しても有効であることは発表された精緻な編年にみられるがごとくで、生産された年代が明らかな窯の資料を基準にした編年が消費遺跡を語る上で欠かせないものとなっている。しかし一方で、陶磁器が消費遺跡の編年研究においてもつ問題点も指摘されている。小林謙一は、①生産地における位置づけ、②伝世等製作時と廃棄時との時間差、③遺跡の機能と陶磁器の器種構成との関連という三つの立場から編年研究における陶磁器研究の問題点を指摘し、これらの関連が解明されないかぎり消費遺跡における編年基軸とはなりえないとし、在地系の日常雑器である瓦質・土師質土器類の有効性に注目する〔小林, 1986〕。このような姿勢は近世考古学における地域毎の編年をめざしたもので、今後、瓦質・土師質土器類がさまざまなレベルでの地域性も強く反映する資料として問題になってくることを予想している〔小林, 1988〕。筆者は縄文・弥生時代の地域性を考える目的で、日常の煮沸用土器である甕をつかった研究を続けてきたこともあり、近世の瓦質・土師質土器類をもとに導きだされた研究成果には関心をもっていたが、小林がさまざまなレベルの地域性として指摘した江戸市中に対する郊外、武家屋敷に対する町屋などの問題は、縄文・弥生時代の地域性を理解するうえでも参考になろう。筆者はここ数年、佐倉城出土陶磁器・土器の整理を続けてきたなかで、江戸市中と近郊に位置する譜代大名の城下町・佐倉の地域性について考えたいと思っていた。今回はその一環として素材に焙烙^{ほうらく}を選び、その派生する問題について検討するものである。簡単に焙烙研究の歴史から振り返ってみよう。

2. 焙烙研究の現状

焙烙とは、ゴマや豆などの食品を炒ったり蒸し焼きにするための瓦質・土師質の土器のことである。今ではあまり使われなくなったがその起源は中世(14～15世紀)までさかのぼり、筆者も祖母が焙烙を使ってゴマを炒っていた姿を子供心に覚えている。現在までの焙烙研究を辻真人や佐々木彰が整理している〔辻, 1988〕〔佐々木, 1990b〕。それによると三つの大きな論点があるように思う。一つは江戸時代の焙烙がどのような経緯をへて出てきたかという系譜・出自の問題。二つ目は、江戸市中とその周辺では焙烙の材質・形態が大きく異なるという地域

差の問題。最後に焙烙の製作技法の問題である。この章では三つの問題を中心に現状を把握する。

(1) 系譜・出自

近世の焙烙が中世の土鍋・焙烙の延長線上にあることは漠然と考えられてきた〔中村, 1979〕〔入山, 1981〕。辻は、関東地方で出土する瓦質平底焙烙と市中に限られる素焼丸底焙烙を地域差として捉え、17世紀以降19世紀まで両者が地域こそ異なるものの併行して存続すると考えている〔辻, 1988〕。近世以降の展開については近年の発掘調査の成果をふまえて、17世紀に関西からの技術導入をうけて発展してきたとする考えが急速に浮上してきた。根拠となるのは東大構内遺跡御殿下記念館から出土した、胴部外面にタタキをもつ1点の土器である（図1—6）。この土器をめぐる江戸在地系土器研究会を中心に出たのが関西からの技術移入をうけて起こった製作技術の変革の結果、瓦質平底系焙烙にかわって土師質丸底系焙烙が成立するという〔辻, 1989〕〔渡辺, 1989〕〔佐々木, 1990 a〕。この説をまとめたのが佐々木である〔佐々木, 1990〕。17世紀前半には江戸市中も瓦質平底焙烙だけだったが（図1—1）、17世紀後半にタタキ技法に象徴される関西系土鍋の製作技法が導入されるや（図1—5・6）、在地の工人がこれを模倣してつくった土師質丸底風の焙烙と（図1—2・3）、関西系工人が在来の伝統を一部取り入れながらもつくった土師質丸底の焙烙（図1—7・8）が出現し、江戸市中では系譜を異にする製作技法をもつ二種類の焙烙が併存するが、その後関西系の土師質丸底焙烙が在地系土師質丸底の焙烙を江戸市中から払拭するという。佐々木の論点は、焙烙の詳細な観察にもとづくものだけに説得力がある。このような動きは焙烙にとどまらずカワラケにもみられる点に注目し〔佐々木, 1990 a〕、土器製作全般における技術体系の変革を想定したものである。佐々木はこの動きの背景に幕府による御用職人の招聘をあげている。工人集団の移封にとまって波及した関西系土器製作技術はカワラケの製作技法を転換させただけではなく瓦質平底焙烙も土師質丸底焙烙へむかわせたのである。平底から丸底への転換に関西の技術がどうかかわってくるか具体的なプロセスの説明はないが、歴史的事実とむすびつけて説明した点は評価できよう。また落合則子も文献から補強をおこなっている〔落合, 1989〕。

このように近世の焙烙研究は江戸市中で17世紀に成立する土師質丸底焙烙の出現過程が中心で、瓦質平底焙烙が中世からどのようにつながってくるのかという問題については、中村の研究以降、遺跡に恵まれないこともあってよくわからないのが実態である。中世の内耳土器に系譜をもつ平底焙烙の出現過程についてはまた別の機会に論じたいと考えている。

(2) 地域差

系譜のところで述べたように江戸時代の関東には内耳をもつ中世瓦質系平底と（図2）、最

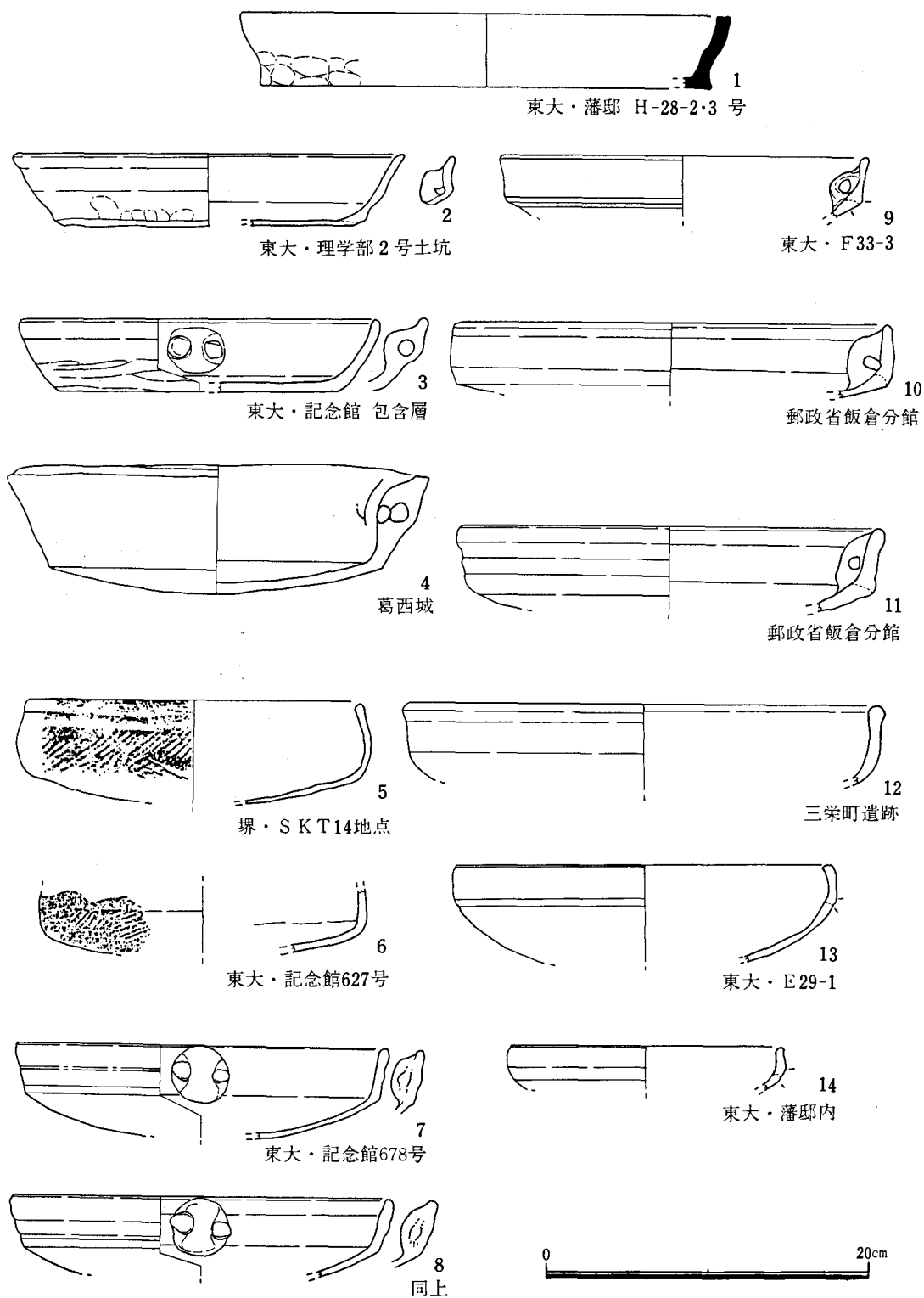


図1 江戸市中出土の焙烙〔各報告書から転載〕 縮尺1:4

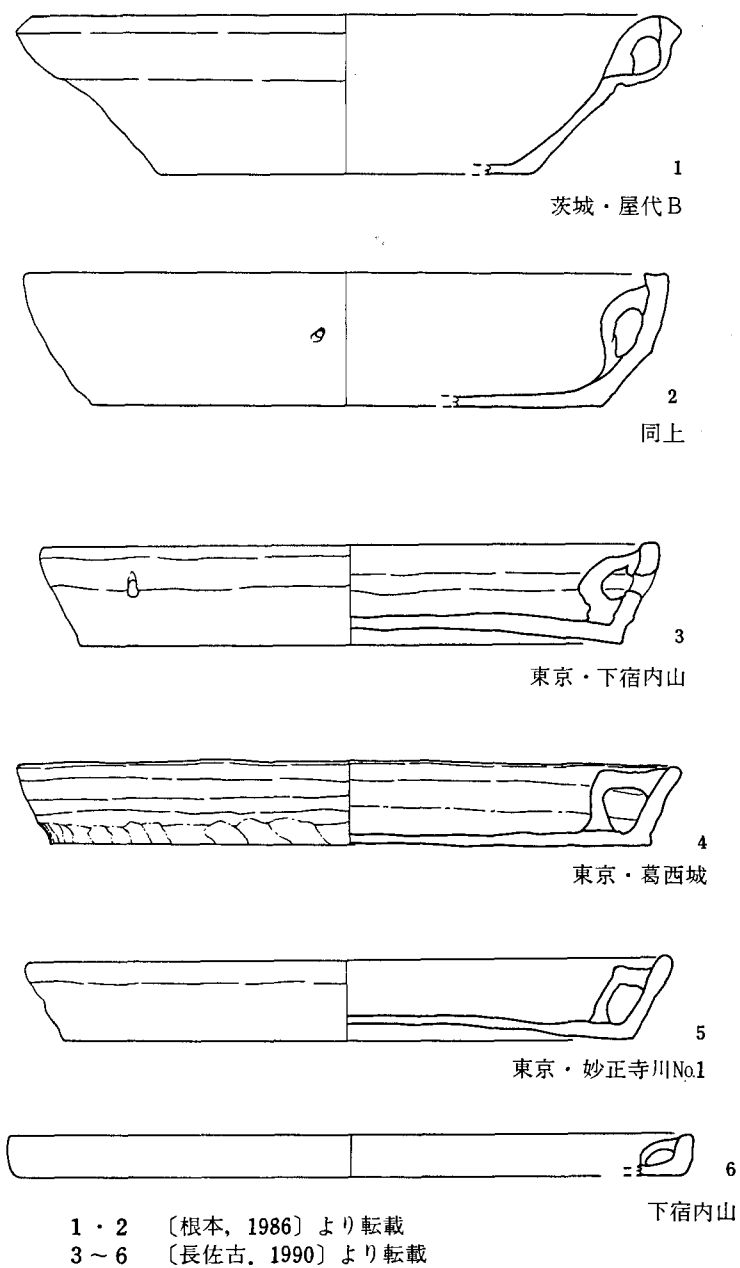


図2 関東の瓦・土師質平底系焙烙 縮尺1:4

初は内耳をもつが18世紀以降に内耳が消失するという土師質丸底焙烙の二者がある。前者は江戸市中以外の関東地方に、後者は江戸市中に偏って分布しているところから、関東でも地域によって焙烙の系譜や形態が異なることが指摘されており、その背景について数々の議論が重ねられている。その代表的な意見は、内耳をもつ焙烙は囲炉裏で用いられ、内耳がない焙烙は竈で用いられるという、内耳の有無を火力施設の違いと考えるものがある。江戸市中では防災上の理由から裸火を扱う囲炉裏が好ましくないことから衰退する傾向にあり、また燃料面でも運搬や熱効率の悪い薪からより優れている炭への転換が進んだことで、火力施設の改良と機能分化に拍車がかかり、竈・囲炉裏に代わって火鉢・七厘を用いる頻度が高くなったという。したがって江戸市中では焙烙を吊るす必要がなくなり内耳のない焙烙が普及したが、囲炉裏が存続していた江戸の周辺では吊るしたり架けたりする必要のある内耳付の焙烙が用いられったりする〔長佐古, 1990〕。この議論が内耳を吊り下げ用の機能をもつ構造と考える前提に立ったものであることはいうまでもない。この視点からさらに議論を進めたのが佐々木である。先述した関西系工人の導入は、幕府によって招聘された御用職人との認識のもと、新しい火力施設に適した焙烙の生産体制にうまく適応した関西系工人の動きが在地の土着的な要素の強い土器生産を圧迫することで瓦質平底系の焙烙が駆逐され、とくに江戸市中では素焼丸底系への転換に拍車がかかったと考えた。関西系工人の適応は増大する需要を支えるために大量生産も可能とするものであった。瓦質から素焼への転換、内耳の製作技法の簡略化などがその代表である。江戸市中の特性に柔軟かつ迅速に対応していったことがうかがえる。

(3) 製作技法の研究

系譜論や地域色の議論を支えるのが製作技法である。金箱文男は近年の焙烙研究が系譜論をやっているわりには形式学的研究がまだ不十分であるとの認識にたち、安易に系統をたどる作業を一時中止し個々の遺物に対する精緻な観察の必要性を説き、多くの属性に注目して徹底的な資料分析をおこなった〔金箱, 1989〕。本稿も金箱の視点に多くを基づいている。製作技法のなかでもとくに注目されているのが型づくり、器面調整、内耳の作り方である。

1 型づくり

底部をつくるときは型の上に砂や粗がらを敷いてその上に薄く粘土をのばす。長佐古は想定図を示している〔長佐古, 1990: 873〕。型から外すときのシワやチヂレの特徴から型の形態が異なる点に注目したのは辻である〔辻, 1988〕。辻は内耳をもつものや深い形のものの底部にシワがみられ、浅い形のものの底部には砂がみられるとしているが、これが時間差なのか生産地や工人の違いを反映しているのかは今後の課題としている。この違いは佐倉城の焙烙でも確認⁽²⁾できる。

2 器面調整

型作りによってできあがった底板の縁にそって粘土紐を輪づみに積み上げたあとで器面調整をおこなう。主なものはロクロの回転を利用したロクロナデや回転ヘラ削り、ヘラ調整、タタキなどである。佐々木がとくに注目したのが土師質系焙烙のヘラ削りで、ヘラ削りがどの位置にあるかで器形が異なることから時間的変化を強く反映する属性との見解を示した。また佐々木がタタキに注目して関西の技術体系の導入を説いた点については、先述したとおりである。

3 内耳の作り方

内耳には粘土紐を口縁部内面から体部内面や底部にかけ渡すものと、粘土塊を貼り付けるものの二つがある。前者は瓦質系と土師質平底系の焙烙に多くみられ中世内耳土器以来の古い製作技法で、長佐古はかけ渡す位置によって三つに分類した(図2-3~5)。内耳を口唇部上端から体部中位もしくは下位にかけ渡すもの(図2-3)。口唇部上端から底部にかけ渡すもの(図2-4)。体部中位から底部にかけ渡すもの(図2-5)の三つで、3から5へ時間的に変化すると解釈している。

粘土塊を貼り付ける内耳もいくつか分類されている。小林は粘土塊を貼り付ける点は同じだが、貼り付けてから指や棒で孔を貫通させる方法から(図1-3)、最初から棒に巻き付けておいた粘土塊を体部に貼り付け、そのあと棒を抜き取る方法(図1-10・11)に変化したと指摘している〔小林, 1988〕。渡辺も団子状貼り付けから小円板状貼り付けへの転換を説いている〔渡辺, 1989〕。

4 胎土

埼玉県赤山遺跡出土の焙烙を検討した金箱は、金雲母を多量に含む土師質平底焙烙は特徴のある口唇部形態と相関性が高いことを指摘し、特定の工人集団と対応するのではないかと指摘する〔金箱, 1989〕。佐倉城出土の焙烙にも土師質平底焙烙を中心に混和材にはいくつかの種類があることを確認しており、生産地・生産集団との対応をはかるうえで有効な視点である。

5 民俗例からみた焙烙づくり

大橋康二が現代土器生産における丸底の内耳焙烙の製作例を報告している。参考のためここでふれておく〔大橋, 1980: 41-43〕。

「焙烙は火に強くするために砂分の多い土や粒子の細かい山土などを粘土と混ぜたものを使う。胎土を観察するとき注意したい点である。

平底の底部は、円い板の上に砂かモミガラの焼灰をふるいにかけてものを敷きその上でつくる。つぎに土製の焙烙の外型をロクロの上に置き、この上にさきほどの底板をすべりこませる。つまり底板となる土製円盤をつくる作業と型にあて丸底にする作業が別々になっていることがわかる。型の上に底板をのせたまま粘土板をロクロの回転を利用しながら口縁部まで積み上げていく。しかしこれはロクロの遠心力を利用して輓きだしたものではない。

内耳は器体が乾燥したあと変形する恐れがなくなってから粘土塊を貼り付け、両側から両手の小指を突っ込んで貫通させ孔をあけてつくる。内耳は2個1対でその間隔は目分量とのことである。」

神埼宣武は丸底の型である凹底が素焼製品であることを述べている〔神埼, 1982〕。

3. 焙烙の諸属性

佐倉城から出土した焙烙の形態、製作技法を検討する。

(1) 形態的特徴

1 器 形 (図3)

佐倉城には二つの種類の内耳土器があって一つは今回あつかう焙烙形、そしてもう一つは土鍋形といっているものである。中村によれば土鍋も焙烙も中世からつづいてくる内耳土器で、足立順一によれば上総・下総の地域的特徴として擂鉢形の土鍋と焙烙がセットになる点が指摘されている〔足立, 1987〕。したがって本稿では土鍋形も考察の対象としてあつかうことにする。

2 口唇部形態

ヨコナデ・ロクロナデを用いてつくる六つの形態がある (図4)。

- a 内側に大きくかえりをもつもの。
- b 内側に錨状につまみ出されるもの。
- c 外側に稜をもつもの。
- d 丸くおさめるもの。
- e 外側につまみ出されるもの
- f 内湾し内側に稜をもつもの。

3 底部形態 (図6)

平底、丸底とその中間形態である平丸底があるがその判別は難しい。焙烙の底板は1枚の粘土でつくられているので粘土紐を積み上げてつくった体部とは区別できるはずである。しかし実際には接合線がわかりづらいので底板と体部の境界を特定しにくいものがある。また平底には底部中央付近が上げ底状になるものと、ベタ底の二種類がある。

4 法 量

口径に注目して1.2尺以上の大形品, 0.9寸から1.2尺の中形品, 6.5寸から7寸の小形品, 5寸台の極小品にわけらる。

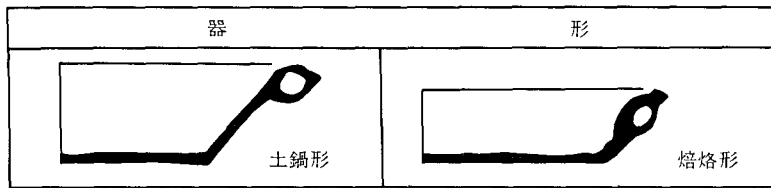


図3 器形分類図

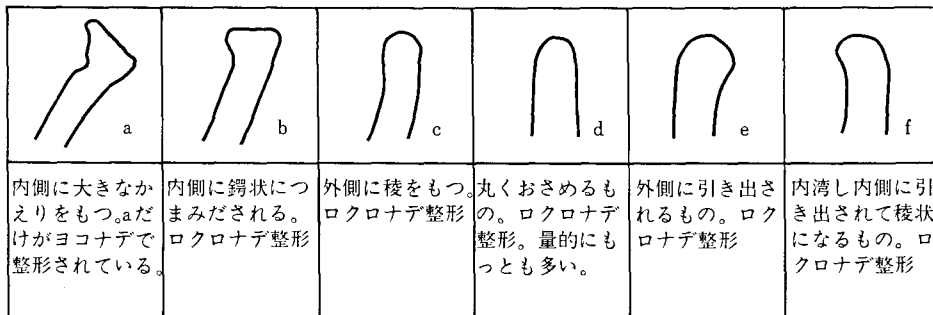


図4 口唇部形態分類図

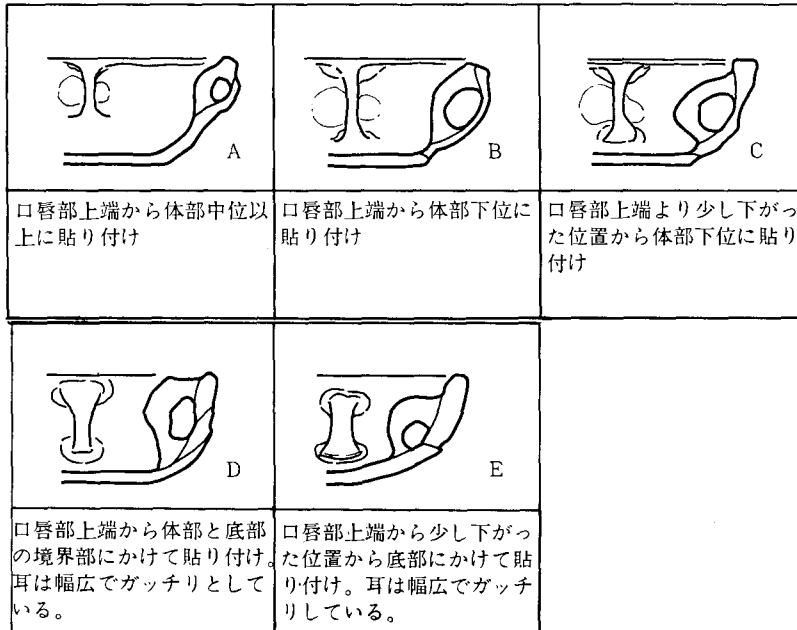


図5 紐状内耳の貼り付け位置と貼り付け法

(2) 製作技法

1 成 形

体部の立ち上げは幅 2～3 cm の粘土紐を積み上げておこなうことで共通するが、底板の作り方にはいくつかの方法がある。平底の場合は回転台の上に直接、もしくは敷物を敷き、平底や丸底の場合は丸くくぼんだ型の上に粘土を薄く伸ばして円形の板にしたものや、糸切り等による切り出し粘土板をおく

が、その時に台からの離れをよくするために砂や靱殻を焼いた灰などを敷くという。いわゆる離れ砂の機能をもつものである。これには簾状の薄い敷物を敷いたと思われるもの（図版 1—1）、靱殻や粗い砂を敷いたもの（図版 1—2）、非常にきめの細かい細砂を敷いたもの（図版 1—3）がある。

2 整形技法

調整技法の種類とその組み合わせ方で特徴的な調整がおこなわれ、いくつかのパターンが存在する。

① 調整の種類

ロクロの回転を利用したロクロナデや、ヨコナデ、ナデ、ヘラ調整、ミガキ、ケズリがある。佐倉城の出土品にはみられないが東大構内遺跡ではタタキを用いた例が報告されている（図 1—6）。

② 調整パターン

内面調整は、底部中央付近を不整方向のナデで外周部から口縁部の内面までロクロナデで仕上げるものと（図版 1—4）、内面全面をロクロナデするもの（図版 1—5）にわかれる。

外面は、体部上半部をロクロナデするものがほとんどだが、単に回転台を利用してナデつけるものと（図版 2—1）、ロクロナデがある（図版 2—2）。下半部は指押えのあとロクロナデを加えるものとヘラナデのもの、ケズリのものにわかれる（図版 2—1・2・3）。ケズリは底板と体部の境界付近に施されるが、その位置に三種がある（図 7）。一つは体部側に施されるもので体部は屈曲し稜をもつ。二つ目は底板と体部にまたがって削るため、稜を二つもつものもある。最後に底板側を削るもので底部に稜をもつ。このようにケズリの位置は形態

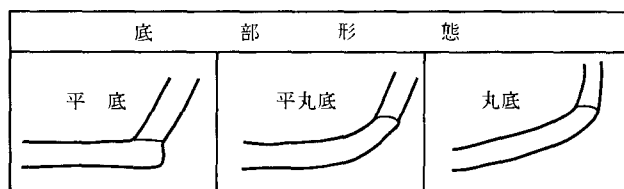


図 6 底部形態分類図

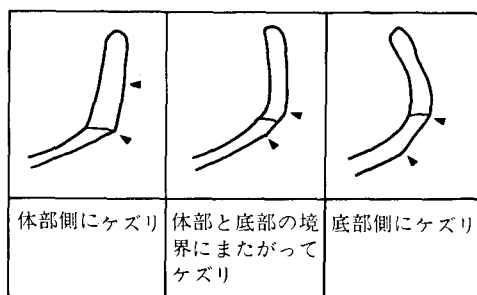


図 7 ケズリの位置模式図

に大きな影響を与えるとともに、時間差も反映することが指摘されている。

3 内 耳

焙烙には内耳をもつものともたないものがあり、もつものの中には製作技法の違いから粘土紐をかけ渡すものと、粘土塊を貼り付け貫通させるものがある。前者を紐状内耳、後者を粘土塊内耳と呼ぶ。さらに紐状内耳には長佐古が指摘したようにかけ渡す位置に五つの種類がある（図5）。A（図版2-3）、B（図版2-4）、Cは耳を貼り付けることによって体部外面が大きく外方に張り出す。これは右もしくは左手の親指と人差指で体部を強く押え込むため、内面には指の関節の痕跡がのこり紐をはさんで両側がくぼむ。くぼみの大きいほうが親指と考えられるため、親指の位置によって左手か右手かが判別できる。D（図版3-1）、E（図版3-2）は体部ロクロナデのあと粘土紐を貼り付け、体部外面は張り出さない。これは紐と体部の接着面だけを押し付けるため、紐をはさんでのくぼみは認められない。

4 色 調

佐倉城出土の焙烙の色調は、暗黄褐色系、灰褐色系、茶赤色系、黄褐色系、燈色・明褐色系が確認でき、器形とも大きく対応している。

5 胎 土

次の五つに大別できる。前の三者は混和材を含むもの。後の二者は混和材を含まないものである。

- ・石英・長石を多く含むもの。
- ・金雲母をきわめて多量に含むため、ギラギラと光って見えるもの。
- ・精良な胎土中にわずか長石を含むもの。
- ・混和材をまったく含まない精良な胎土で壁内に還元帯をもつもの。
- ・混和材をまったく含まない精良な胎土で壁内に還元帯をもたないもの。

この中には特定の器形との相関性が高いもののあることがすでに指摘されており、工人や生産地の違いを反映しているのではないかとの意見も出されている〔金箱, 1989〕。

(3) 型式分類

以上の観察にもとづき佐倉城出土の内耳土器を次のように分類した。まず、器形から土鍋形と焙烙形の二つにわけ、後者は内耳の有無や形態、底部形態から細分をおこなった。

1 土鍋形（図8-1）

内耳をもつ土鍋形の土器は土師質のものしかない。耳は焙烙のように粘土紐を貼り付けたというよりも、体部を掘りくぼめて孔をあけたというもので、2耳1対の計4耳からなる（図版3-3）。耳に対応する体部外面は大きく外に張り出している（図版3-4）。若干上げ底状の平底から外方に反り返るように立ち上がる体部をもつ。口唇部は幅2cmの幅広い平坦面をも

ち、内側に大きく反り返る口唇部 a である。色調は暗黄褐色系、金雲母と長石・石英粒を弥生土器や土師器のように多く含む胎土である。口径 1.2 尺から 1.3 尺、器高 2～3 寸、底径 7～8 寸の大形品である。底部の成形には離れ砂の痕跡は認められず、体部は粘土板を積み上げることで成形する。調整にロクロは用いず体部内外面の上半部と口縁部をヨコナデで仕上げそれ以外は指でナデただけである。使用の時についたススは、内耳より下の外面に認められるため、これから述べる焙烙とは使用状況が異なっていたと考えられ、調理法も含めて考える必要がある。土鍋形は今回の資料の中には 3 点しか含まれていない。出土したところは 1977 年千葉県文化財センターが調査した管理棟敷地内の武家屋敷跡のトレンチ内から出土した 2 点（図版 3—5）（佐倉城跡第 3 次調査）と、1984～85 年国立歴史民俗博物館が調査した研究棟敷地内の杉坂武家屋敷跡の包含層である（佐倉城跡第 9 次調査）。出土状況から所属時期を絞りきれないが、土鍋形の器形が中世に近いことや、第 9 次調査によって 1590 年の北条氏滅亡以前の遺構の存在が予想されていることを考えれば、中世末に属する土鍋形内耳土器⁽³⁾が存在した可能性も強い。次章で後述する。

2 焙烙形

九つの体部にわかれる。Ⅰ～Ⅲ類は平底で器高と体部高がほぼ一致する焙烙である。すべて紐状内耳をもつ。Ⅳ・Ⅴ類は平丸底で、器高に占める体部高の割合が 50% 以上の焙烙である。紐状内耳のⅣ類と粘土塊内耳のⅤ類にわかれる。Ⅵ～Ⅹ類は内耳をもたない焙烙である。Ⅵ類は丸底で土鍋状を呈す。Ⅶ類は丸底で体部高が器高の 50% 以下、Ⅷ・Ⅹ類は 50% 前後を占める。Ⅸ類は把手付の焙烙である。

Ⅰ類 瓦質で体部がまっすぐに立ち上がるもの（図 8—2，図版 4—1・2）。耳は出土していないがおそらく内耳をもつ焙烙であろう。ベタの平底でやや内湾しながら立ち上がる器形である。色調は灰褐色で細砂混じりの粒度の細かい胎土である。口径 1.3 尺，器高 2 寸，底径 1.2 尺の大形品である。底部はチヂレ目がみられるので粗い離れ砂を敷いた上で底部を成形し粘土板を積み上げたものと考えられる（図版 4—2）。耳は江戸の類例からみて紐状内耳 B と考えられる。外面上部から内面にかけてロクロナデで仕上げ，外面下半は指でナデる程度である（図版 4—1）。ススはみられなかった。佐倉城では 1 点しか確認できず，佐倉城では瓦質のものはなかったと考えられるが，これが時期差なのか地域差なのかについては後述する。本資料は 1983 年国立歴史民俗博物館が調査した宿泊棟敷地内の天神曲輪から出土した（佐倉城第 8 次調査）。相伴遺物はないが江戸の例からみて 17 世紀のものであろう。

Ⅱ類 土師質で体部が湾曲しながら立ち上がる平底の焙烙で，細部形態や手法に中世土鍋の伝統を強く保持する過渡的な焙烙である（図 8—3～6）。色調・胎土から二つにわかれる。

A 暗黄褐色系で土鍋と同じである（図 8—3・4）。底部は平底と思われ体部が湾曲しながら立ち上がり，形態的には焙烙形だが器高が高いほうである。しかし口唇部は内側や外側

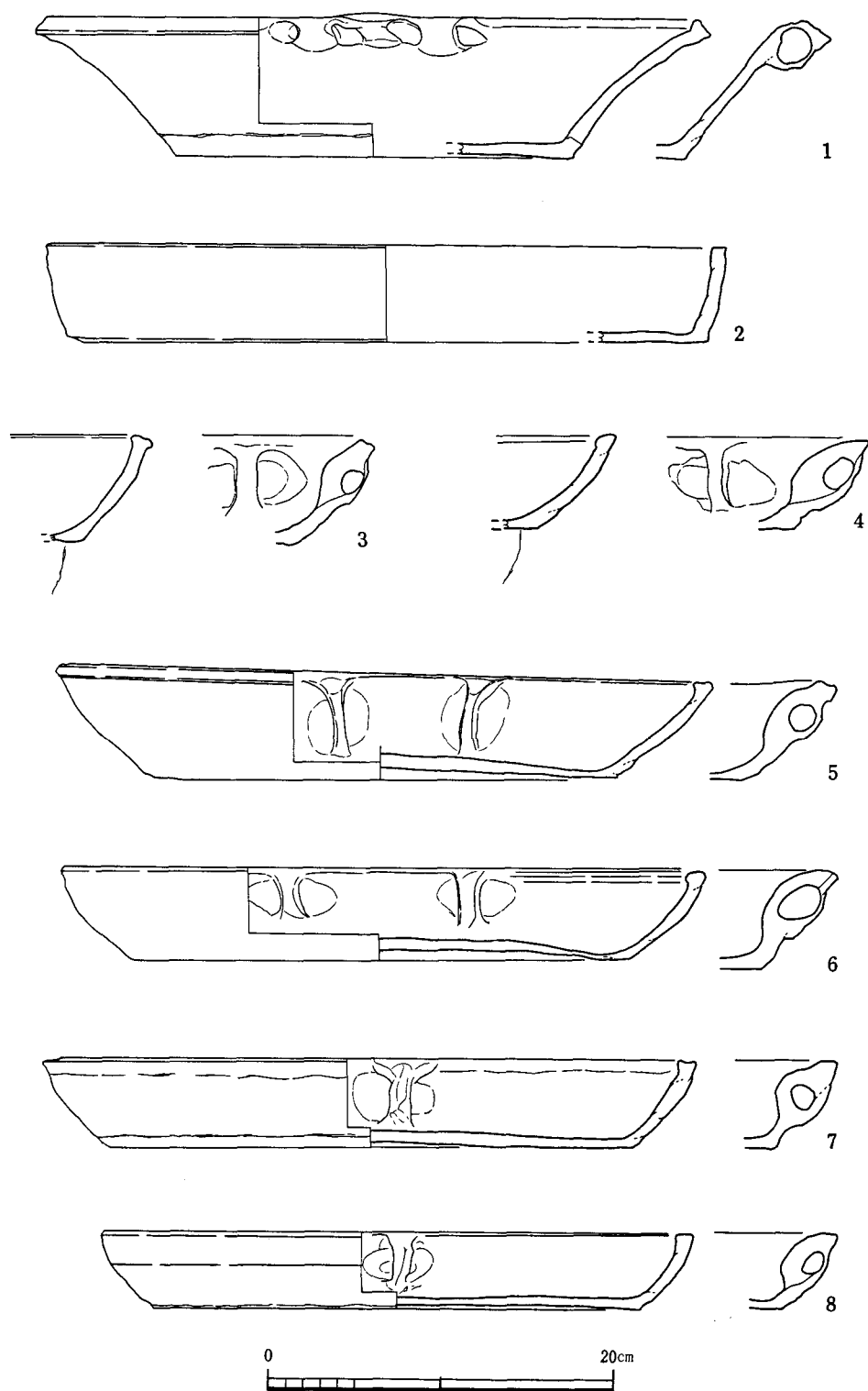


図8 佐倉城出土焙烙実測図(1) I～Ⅲ類 縮尺1:4
(土鍋・中世平底系焙烙)

にかえりをもつbで、またヨコナデによって上面がくぼむ土鍋の特徴を強く残している(3)。内耳は粘土紐を口唇部の上端から体部にかけ渡す紐状内耳で内面の上の方に偏って貼り付けられる内耳Aでこれも土鍋に近い特徴である(図版2-1)。やはり耳に対応する体部外面は大きく張り出す。口径と器高はI類と変わらないが底径が9寸のやや小さいものもあり、I類に比べて体部が外傾していることがわかる。胎土は長石がやや目だつ程度で3mm台の石英を含む。底部には粗面と合わせ目がみられ(図版4-3)、何かを敷いた上で底板をつくったと推定できる。破片資料のため確実でないが簾状の敷物である可能性を考えている。体部は粘土板積み上げで接合線らしきものが確認できる。体部外面から口縁部・体部内面まではロクロナデ、内面中央はナナメ方向のナデ、体部下半は指ナデという土師質平底焙烙の調整パターンがすでに完成していることがわかる。ススは口唇部外端部から体部外面にかけてみられとくに口縁部外面に強く残る点と、口唇部上面と底部にはススがつかないことに注意する必要がある。口唇部につかないのは木蓋を使用したため、底部につかないのは直接火⁽⁴⁾があたっていたためで、使用形態を知るうえで有効な特徴である。いずれも研究棟堅坑内から出土した。遺構から時期は特定できない。

B 茶赤褐色で金雲母・長石を含むようになりAに比べて細部の手法はより焙烙に近づいている(図8-5・6)。底部は上げ底で底板に粘土の合わせ目がある(図版5-2)。内耳は体部の上半に偏る内耳Aである(図版5-3)。金雲母の量はまだそれほど多くない。底部には簾状の粗面がみられる(図版5-2)。外面下半にケズリ状のヘラ調整がみられる。そのほかの特徴はAと変わらない。図8-5は研究棟No. 900 遺構地下倉坑土内から出土したもので17世紀前・中葉の肥前系陶磁器と伴っていることから、時期の一端をおさえることができる。図8-6は石英の量が目立つ資料で、色調は土鍋の色に近い。口縁部などがまだ焙烙としては定型化していない。耳と口唇部の接合線がはっきりと確認できる資料である。

Ⅲ類 土師質で体部が湾曲しながら立ち上がる平底の焙烙で、佐倉城で出土した焙烙の中で最も数が多く、平底系焙烙として定型化したものである。口縁部形態から二つにわかれる。

A 体部上半のロクロナデによって二次的に口縁部が内側に内折したり、体部外面に稜が生じるものである(図8-7・8、図9-1・2)。底部はやや上げ底で湾曲気味に立ち上がる体部をもつ。口唇部は土鍋状のかえり(口唇部形a)をもつ図8-7や内折する図8-8・図9-1などがある。紐状内耳は口縁部の上端から体部の下半まで粘土紐をかけ渡す紐状内耳Bで、ほぼ内面一杯を占める。内耳部の体部外面は外側に張り出す。色調は茶赤色で金雲母を含むがその量はそれほど多くない。法量はⅡ類と変わらない。粗面には簾状のもの(図9-1、図版1-1)と粗い離れ砂のものがある。Ⅱ類にみられた底板での合わせ目はみられなくなり、体部外面最下端に移動するようである。成形技法が変化したのであろうか。体部は図8-7にみるように3段にわたって粘土板を積み上げる。器面調整はⅡ類と同じだ

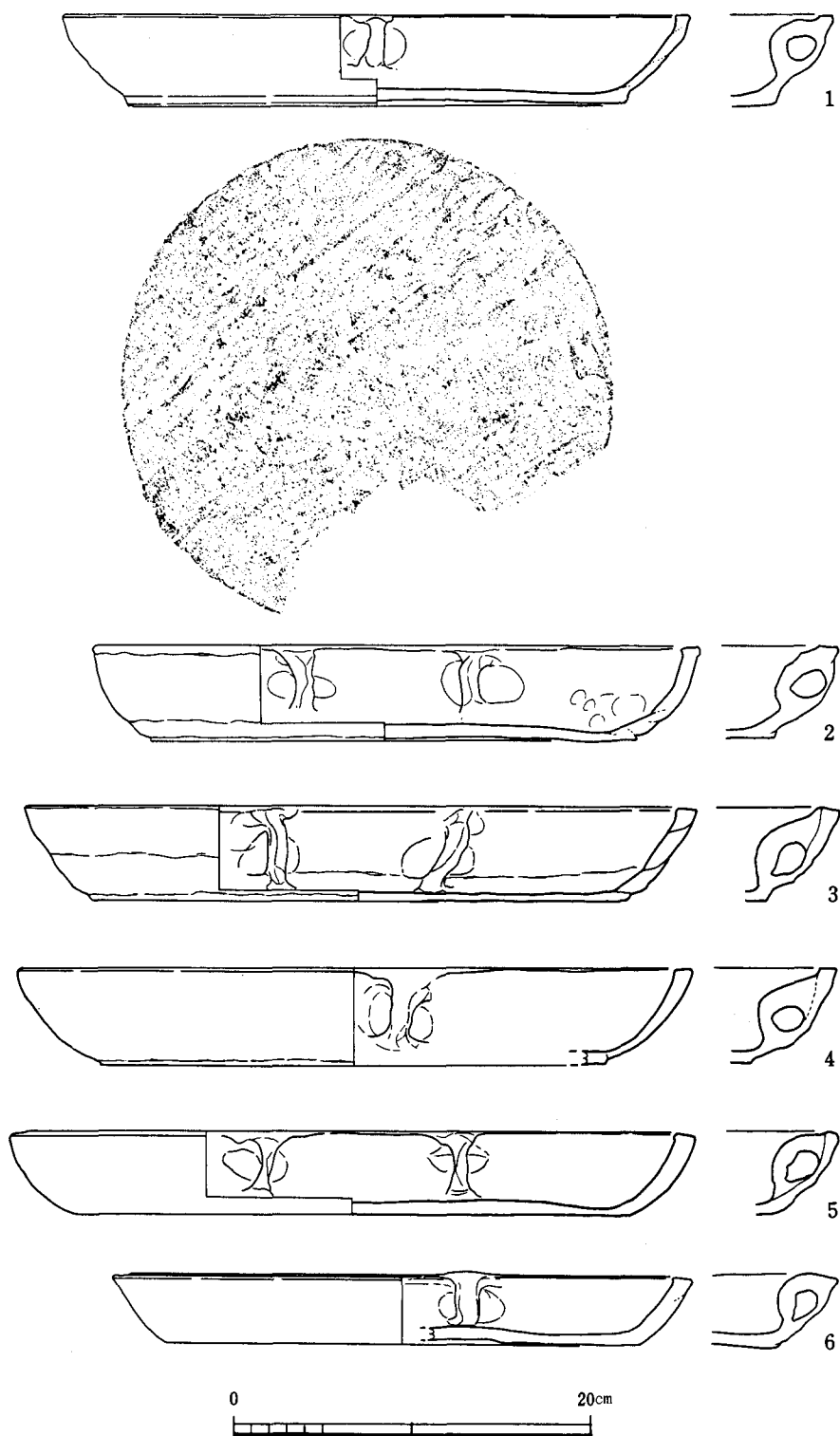


図9 佐倉城出土焙烙実測図(2) Ⅲ類 縮尺1:4
(中世平底系焙烙)

が、体部下半は図9—2にみるように底板が突き出すものがあり、これをいかにヘラやナデによって消すかに苦心のあとがうかがえる(図版5—5)。研究棟を中心に出土し、17世紀後半から18世紀前半の陶磁器や18世紀代の陶磁器に伴っている。なかには19世紀の花塩壺と伴っている例もあり、厳密な時期の特定はできない。

B ロ縁部が内折したり口唇部が大きく内側にかえることはなくなり、ロクロナデによってわずかに内側に突出する鋤状口縁(口唇部b)を大きな特徴とする(図9—3~6)。内湾しながら立ち上がる体部、茶赤色の器壁、金雲母を含む点が埼玉県赤山遺跡で注目されたものと同一で、同じ生産地・工房でつくられ江戸市中を除く関東一円に流通した可能性がある焙烙である。特に図9—4・5は金雲母の量が著しく多く光沢をもつ(図版5—6)。底板には簾状の粗面と(図9—3, 図版5—5), 粗い離れ砂の二者がみられるがかなり密度の細かい丁寧なものとなっている。内耳はやや偏平になり体部一杯に貼り付ける紐状内耳Bである。内耳の断面形は丸みをもつ逆二等辺三角形である。体部の粘土帯積み上げは内傾接合で底部との接合方法がよくわかるのが図9—3である。器面調整は典型的なもので、中には図9—3のようにロクロナデがきついたために体部が大きく波うつものも存在する。法量はⅢA類とかかわらないが器高が1.5寸でやや低いものや(図9—5), 図9—6のように口径が1尺強になったやや小さいものもでてくる。17世紀後半から18世紀前半の陶磁器や、19世紀の陶磁器が伴出するものもあり特定できないが、18世紀を中心とするものであろう。

Ⅳ類 器高に占める体部高の割合が50%以上の平丸底焙烙で、紐状内耳をもつ。内耳の付け方はⅠ~Ⅲ類と異なり、体部のロクロナデのあとに耳を貼り付けるもので、その時指を直接体部内面に押し付けないため、耳をはさんで指の関節によると思われるくぼみはもはやみられない(図版5—6)。黄褐色系の焙烙である。器形や調整技法から三つに分けることができる。

A やや上げ底で、ケズリを体部側に施すことで底部との境に稜をもつ口唇部形態cの焙烙である(図10—1・2)。器高が口径の割に高く、焙烙としては深い部類にはいる。体部下半の器壁が厚いのも特徴の一つである。耳は口唇部の下から内面一杯に紐状粘土で貼り付ける内耳Cで、断面は平べったい楕円形になり、Ⅲ類にくらべて非常にガッチリとした耳になる(図版6—2)。底面は粗い離れ砂痕をナデ消したものである(図版6—3)。粘土板積み上げで体部をつくるが接合線はよくわからなかった。器面調整で注目されるのはケズリがはじまることと、ロクロナデが水びき状になることである。ケズリが体部側に用いられるので、図10—1では稜状になり底部との境界も明瞭になる(図版6—4)。また、たたくとカラカラと音をたてるほど非常に焼きがよい。胎土は混和材が認められない精良なもので、器壁には還元帯が認められる。還元帯はⅠ~Ⅲ類にはみられなかった特徴である。いずれも研究棟包含層の出土で遺構から時期は特定できない。

B Aより少し大きい1.2尺の口径をもつ大形の焙烙で、ケズリを体部側に施すものである

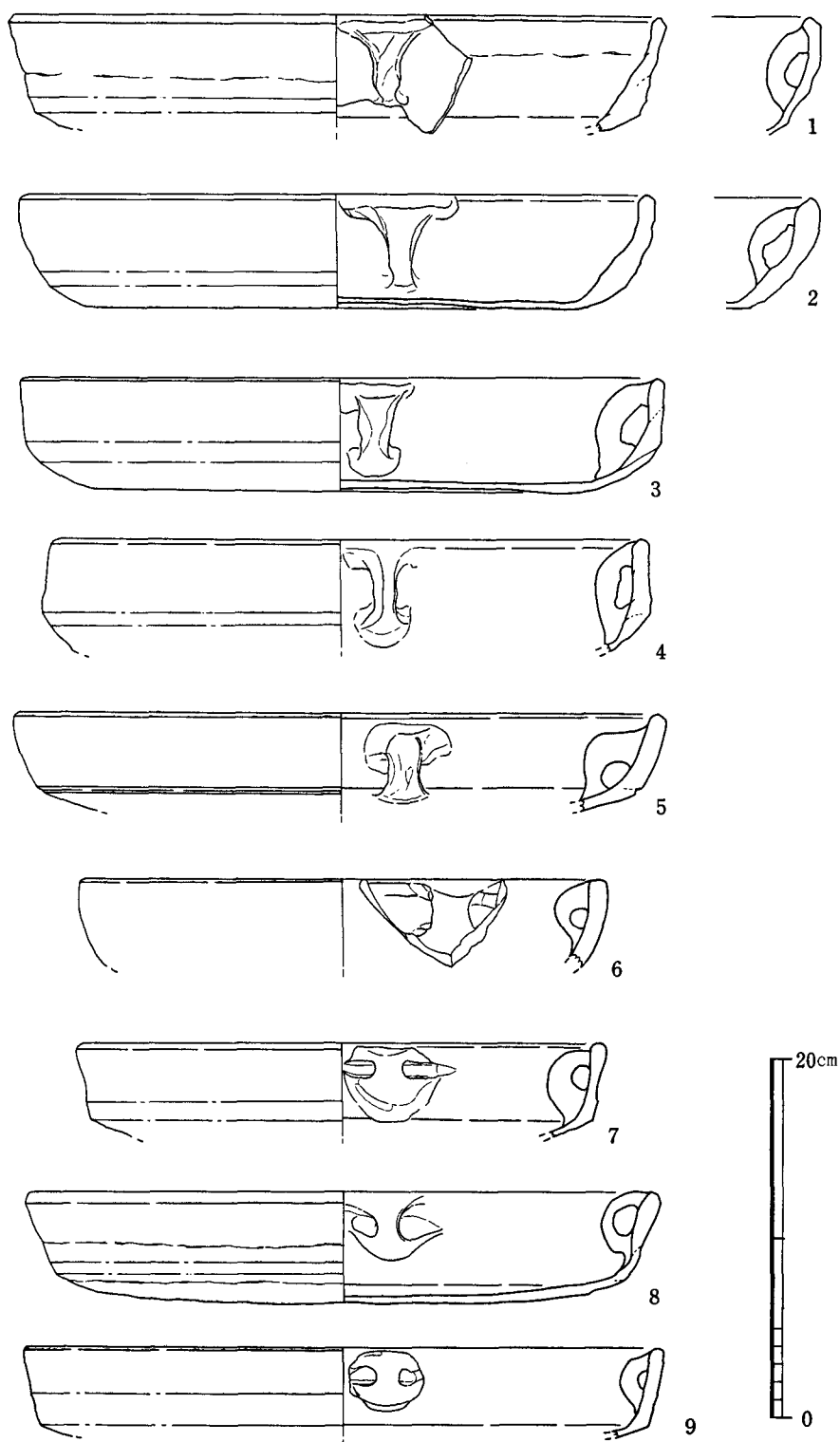


図10 佐倉城出土焙烙実測図(3) IV・V類 縮尺1:4

(図10—3・4)。図10—3は接合線で割れていたのが製作技法がわかりやすい(図版6—5)。底板の縁を上方に折り曲げその上に粘土板を積み上げて体部を直線的に立ち上げる。口唇部は外側にロクロナデによる稜をもつ口唇部形態cである。体部下半の器壁はAと同じく分厚いことから接合線が観察できなかったIVA類の成形技法を推測できる資料である。耳はAとおなじくガッチリとしたもので、孔は垂直方向に細長くなっている。ロクロナデのあと耳を貼り付け、耳の両側の体部がくぼまない点はAと同じだが、内耳の貼り付け位置は紐状内耳Dである(図版7—1)。胎土に混和材と思われるものは認められず精良な胎土で器壁内に還元帯をもつ。内面の調整が全面ロクロナデになり従来とは大きく変化する(図版7—2)。図10—3の底部内面中央には江戸ではみられず佐倉城出土焙烙でも一点しかなかった刻印がある(図版7—2)。時期の特定はできないが、出土状況からみて18世紀代におさまるのであろうか。

C IV類の中では最もガッチリした幅3cmほどの紐状内耳をもち外見的には粘土塊内耳にかなり近い焙烙である(図10—5・6)。粗い離れ砂の痕跡をもつ底板に粘土板を積み上げ、とくに図10—5はかなり外に開き気味に仕上げる。口唇部は丸みをもたせている。体部と底部の境界部にヘラで削り取ったような部分がある(図版7—3)。内耳は紐状内耳E(図10—5)とB(図10—6)で、IVA・IVB類と同じく耳をはさんでくぼみはないが、とくに図10—6には棒状のものを引き抜いたような痕跡が認められるので、棒をはさんだ紐状内耳がすでに存在している点でおもしろい資料である(図版7—4)。胎土に微細な石英砂をわずかに含むが精良なもので、還元帯は認められない。研究棟 No.810 地下倉と同 No.890 地下倉から出土したもので伴出した陶磁器から18世紀を中心にするものと考えられる。

V類 平丸底で体部高が器高の50%以上の焙烙のうち紐状内耳ではなく体部をロクロナデしたあと粘土塊を貼り付け孔をあける粘土塊内耳の焙烙である(図10—7～9)。佐倉城からの出土はきわめて少ない。1点しかない完形品(図10—8)から判断して丸底風の平底と考えた。体部が直線的に立ち上がる図10—7・9と湾曲しながら立ち上がる図10—8がある。胎土は黄褐色系で精良だがわずかに石英砂を含む。図10—8には還元帯が認められる。口径7寸しかない図10—7のような小形品と口径1.1尺前後の中形品がある。粗面は粗い離れ砂の他にいわゆるチヂレのものも出現するが(図10—7・9, 図版8—1), チヂレの粗面は1尺以下の小形品に限られており、離れ砂の焙烙との量的な関係は不明である。体部は図10—8のように粘土板の積み上げが確認できるものもあるが、図10—7・9では確認できなかった。口唇部は丸くおさめる口唇部形態dがほとんどである。内耳には江戸で指摘されているように粘土塊製作時から挟み込んでいた棒を抜き取ることによって孔をあける図10—7・9(図版7—4)と指で孔をあけたと推定される図10—8の二種類があり、指の方が孔が大きいことがわかる(図版8—3)。これらはすべて体部に貼り付けられたもので底部までかぶさるものはない。体部外面

上半と内面は全面ロクロナデで水引きに近いものである（図版8—3）。ロクロナデがきついため口縁部の下位がくぼむ特徴をもつ。ケズリが体部側に施されるために図10—7・9には稜ができる（図版8—1）。研究棟から出土したもので伴出遺物から推定すると18世紀から19世紀にかけての時期に位置づけられよう。粘土塊内耳に近いと考えた紐状内耳をもつIVC類の図10—6とV類の図10—7は、胎土や耳の断面形態、7寸という小形品であることなど共通点も多く佐倉における粘土塊内耳の出自を考える上で興味深い事実である。江戸では団子状から小円板状貼り付けへ、指孔から棒状工具への移行がいわれているが〔渡辺, 1989〕, 佐倉城には団子状のものしかなくまた指孔と棒の時間的關係も不明である。しかし、棒を抜き取ったような紐状内耳が存在することは、棒状工具の粘土塊内耳の出現時期がここ佐倉においては、非常に近接していることを物語っているとともに、紐状内耳の消滅と粘土塊内耳の出現が時間的に近いことを予想させる。

VI類 典型的な焙烙ではないが製作技法が同じで、ススも焙烙と同じ位置についているので、焙烙と似た機能をもつと考えられる土師質の土器としてここで取り上げることにした（図11—1・2）。完形品がないので全体の器形は不明だが浅い土鍋形になるのであろうか。底部形態は不明だが粗い離れ砂の粗面をもつのでこの部分が底部の縁にあたるとすれば丸底に近いのではないかと考えられる（図版8—4・5）。底板に粘土板を3段積み上げて器体を成形する（図11—2）。水引き状のロクロナデによって口唇部形態eを作りだす。図11—2はケズリを体部側に施し稜が口縁部との境界部にかかるくつく。口縁部下位から体部内面はロクロナデを用いるがこのロクロナデによって体部形態は図11—1と図11—2にわかれる。法量はいずれも1.2～1.3尺でかなりの大形品である。胎土・色調・焼成は土鍋に近く混和材をほとんどもたない胎土、還元帯が認められる器壁で、色調は暗黄褐色系である。ススは焙烙と同じく口唇部外端面から下にしかつかないで、木蓋の使用が考えられる。内耳があったかどうかは不明である。三栄町遺跡から出土した資料と同類のものであろうか（図1—12）。

A 図11—1（図版8—2）は口縁部の下に段状に強いロクロナデを幅狭く加えて整形したものである。胎土には混和材をまったく含まない。研究棟 No.940 井戸から出土したもので伴出した陶磁器から18世紀前葉から19世紀前葉の時間を与えることができる。

B 図11—2（図版8—3）は口縁部の下に幅広く深いロクロナデを加えて整形したものである。Aと異なり胎土中に石英粒や茶褐色の粒子を含む。研究棟中段の近世住宅の上面から出土したが伴出遺物がないため時期の特定はできない。

VII～X類は内耳をもたない丸底・平丸底の焙烙で明黄褐色・明褐色・燈色系の明るい色調のグループである。

VII類 口径が1.1尺の中形で器高に占める体部高の割合が50%以下の焙烙である（図11—3～6）。体部が直線的に立ち上がる3・4とやや内湾する5・6がある。底部にはいわゆるチヂ

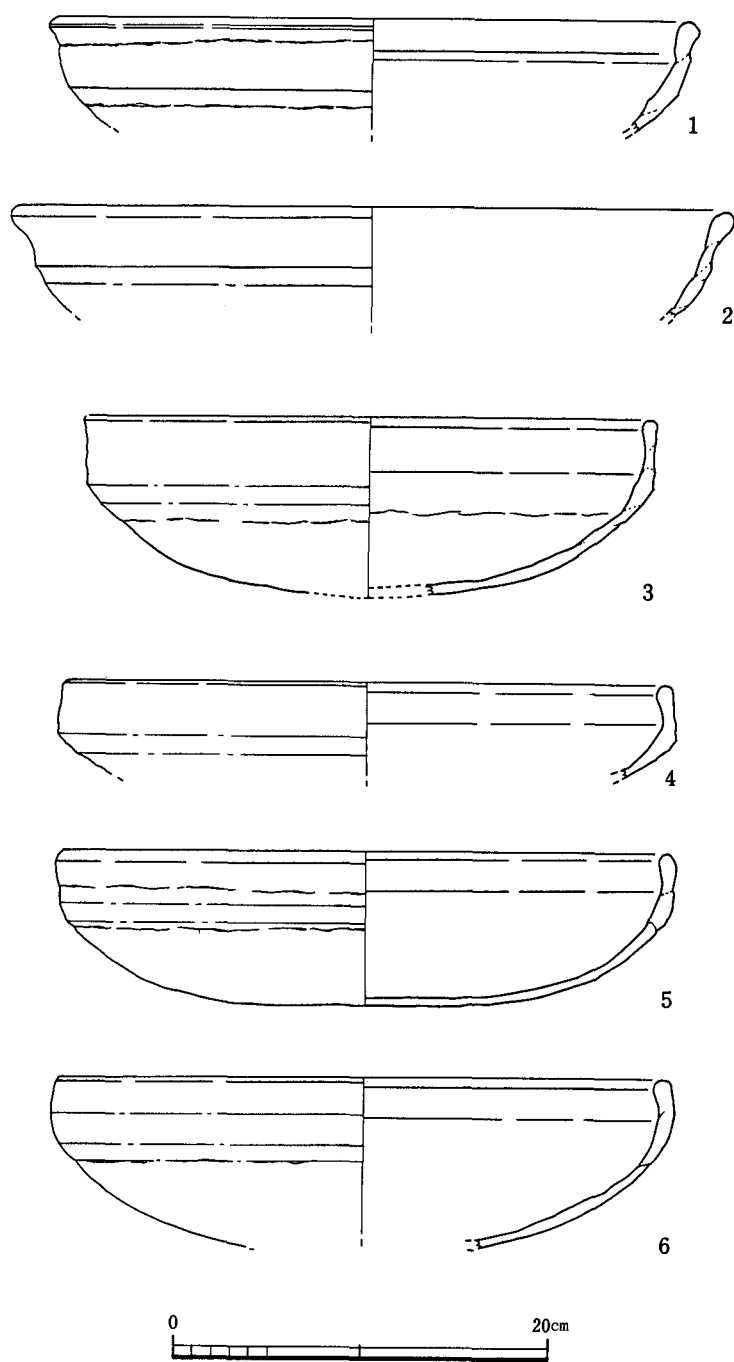


図11 佐倉城出土焙烙実測図(4) VI・VII類 縮尺 1 : 4

レの粗面がみられるが3や5の場合、チヂレはとくに体部との境界部に近い底部の縁に集中してみられ、底部の中央付近には粗い離れ砂の痕をナデ消したような面をもつことから、使用に伴う二次的な火を受けたことによってチヂレが生じたのではないかと⁽⁵⁾の意見もある(図版9—1)。底板の成形後、粘土板を積み上げて体部を成形するが、立ち上がりは従来の焙烙に比べて短く、器高に占める体部高の割合は50%以下である。口唇部形態fでこれは口縁部内面に強く大きなロクロナデを加えることによって作りだされたものである。胎土は石英粒や赤褐色の粒子をわずかに含む程度の精良なもので、還元帯はまったく認められない。焼成はよく特に4は金属的な音がするほど堅緻である。

A 直線的に立ち上がる体部と底板側にケズリを加える特徴をもつ(図11—3・4)。その結果、底部と体部の境で屈曲するような器形になる。3は底部内面の中央付近を不整方向のナデで仕上げ、4は全面ロクロナデである。3は研究棟 No. 810 地下倉から18世紀前葉の肥前系陶磁器とともに出土した。

B 内湾気味に立ち上がる体部をもつもので底部側にケズリ調整を加える図11—6と、体部と底板にまたがってケズリを施すために底板と体部との境界がはっきりしない図11—5がある。いずれも内面は全面ロクロナデである。2点とも研究棟 No. 3388 井戸から出土したもので18世紀の陶磁器と伴出している。

VIII類 口径が6寸半ほどの小形丸底焙烙で器形はVII B類に似ているが、本類の方がやや扁平

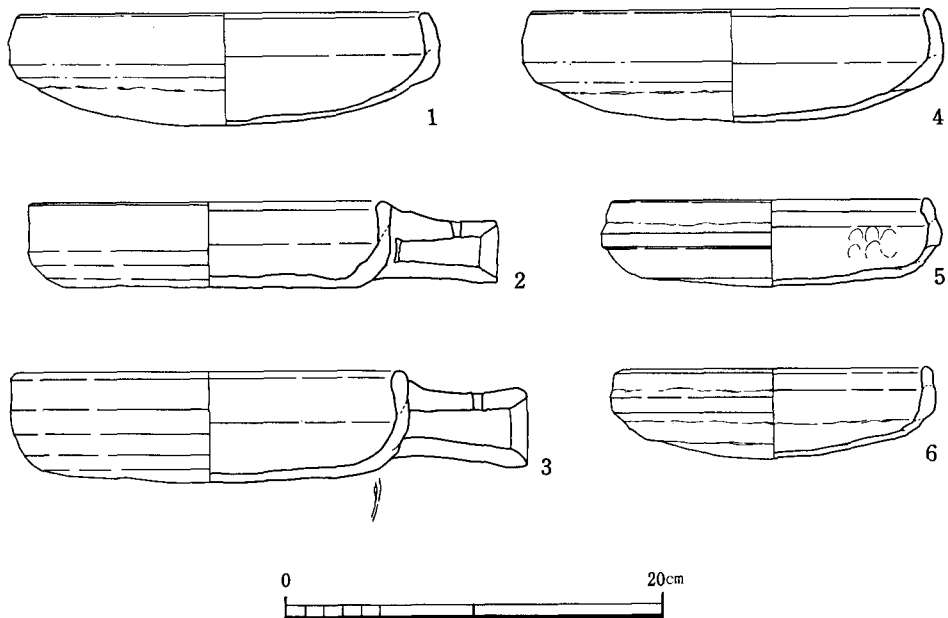


図12 佐倉城出土焙烙実測図(5) VII・IX・X類 縮尺1:4

[illegible]

※ 表中の?は不明なものが存在することを示す。

で体部の内湾度が強い（図12—1・4）。胎土は混和材を含まない精良なもので焼きもよく明るい燈色を呈す。底板の粗面は0.5mm以下の非常に細かい砂の痕跡がついた離れ砂の痕跡が全面に認められる（図版9—2）。Ⅶ類のように底板の縁にチヂレはみられない。これはこの焙烙の使用法とも関係している。詳細は報告書に譲るがこの焙烙は調理に使用したものでなく、火をうけていないことと関係していたとすれば、チヂレが二次的な火を受けたことに起因するとした先の仮説の妥当性も高まってこよう。体部は底板に粘土板を積み上げて成形するが段の数は1～2で少なくなっている。ケズリを底板側に強く施すためケズリの上下に稜が2本みられる。体部外面から内面全面は水引状のロクロナデである。研究棟 No. 490 祭祀土坑から図12—5・6とともにセットで出土した。出土状況から18世紀末から19世紀の早い時期に考えられている。

Ⅸ類 口径6.5寸の把手付小形平底焙烙である（図12—2・3）。立ち上がりのない平底に体部が湾曲しながら立ち上がる。混和材を含まない精良な胎土で還元帯はない。底板の粗面には0.5mm以下の細かい離れ砂がびっしりと残されている（図版1—3）。体部は3からみる限り粘土板を3段ほど積み上げていることがわかる。ケズリをまったくつかわずに強い水引状のロクロナデによって整形するため稜状にナデの単位が確認できる。体部外面から内面は全面ロクロナデで仕上げる。本体をつくったあと筒状につくった把手を貼り付ける。把手の持ち手側の内面はヘラによって斜めに面取りされている。目釘孔が1カ所開けられているため、木の棒などを差しこんで使用していた可能性もある。Ⅶ類や次にのべるⅩ類に型式学的に近いことから19世紀に属するものと思われる。

Ⅹ類 口径5.5寸の極小形焙烙で丸底に近い底部をもつ（図12—5・6）。器形はⅧ類と同じく内湾しながら体部が立ち上がるものでⅧ類を小形化したものである。胎土・色調はⅦ・Ⅷ類と変わらない。底板の粗面は離れ砂の痕をナデ消したようなものだが（図版9—4）、体部との境界付近に近い底板の縁の部分はチヂレによるシワが激しく認められる（図版9—5）。本類もⅧ類と同じ祭祀土坑から出土し日常的な煮沸に用いられたものではないので、このシワは二次的に火を受けたことによってできたものではなく、器面調整に原因する可能性が強い。体部は粘土板を2～3段積み上げて成形する。体部側にヘラ削り状の強いナデによって段や稜を作りだしており、隆带状の帯が体部に巡っているように見える（図版9—6）。この調整は砂粒の移動がみられないためにケズリとは判断しなかった。口縁部外面から内面の調整は図12—5が全面ロクロナデだが、図12—6は底部内面中央付近だけ不整方向のナデを施す（図版9—5）。セット関係からみて18世紀末から19世紀の早い段階に位置づけられよう。

以上が佐倉城から出土した焙烙の説明であるが、型式毎の属性一覧を表1に示しておいたので参考にしてほしい。

4. 佐倉城出土焙烙の特徴

江戸市中の焙烙との比較をおこなうことで、佐倉城の焙烙を特徴づけてみる。佐々木彰によれば江戸市中でも17世紀の前葉までは佐倉城のⅠ類と同じく平底の瓦質焙烙がみられるが、17世紀中葉になると佐倉城でⅤ類とした平底で粘土塊内耳の焙烙が早くも出現するという〔佐々木, 1990b〕。佐倉城Ⅴ類の時期は、伴出した陶磁器からは17世紀後葉までさかのぼる例もあるが、18世紀後葉から19世紀前葉の陶磁器に伴出する例がもっとも多い。佐倉城の粘土塊内耳は渡辺が古いタイプとした団子状で図10—7・8にみるように内耳の下端は体部と底部の境にかかっているものと図10—9のように体部内におさまるものの二種がある。江戸で粘土塊内耳の下端が底部までかかるようになるのは東大構内遺跡F—33（図1—9）や郵政省飯倉分館（図1—10・11）など18世紀前半のものからで、それ以前はすべて体部内におさまっている。このことから考えれば陶磁器と伴出した佐倉城の粘土塊内耳の焙烙の時期との差も縮まってくる。したがって粘土塊内耳をもつ焙烙は江戸より遅れて出現し、それまでは紐状内耳をもつⅢ・Ⅳ類が中心であったと考えられる。佐倉城が江戸市中と同じタイプの焙烙になるのは18世紀のある段階からということができよう。江戸と佐倉にみられた地域差が生じた背景には、渡辺や佐々木のいうように幕府が関西から江戸に招聘した御用職人が焙烙・カワラケ作りに参入し、関西系技術を用いた丸底焙烙が発展する一方で、江戸の周辺地域では中世以来の技術伝統にある平底系焙烙が継続してつくられていたという説明がおこなわれている。これは佐倉城だけでなく武蔵国赤山城の焙烙にもいえる現象で、なおかつ佐倉城でもっとも多い定型化した平底焙烙のⅢB類が関東に広く分布していることを考えあわせるとき、江戸を中心とした関西系の技術を導入した焙烙と周辺部の中世平底系焙烙の地理的分布がみえてくるのである。江戸で関西系焙烙が普及した背景には急速に進んだ囲炉裏から竈への転換がある。この動きは防災上や燃料の供給面の理由から進行していたが、丸底で精良な胎土という形態や材質、大量生産が可能な関西系焙烙はこのような消費のニーズにうまくのっていったと考えられる。一方、佐倉城で竈が確認されるようになるのが18世紀中ごろからである。

それでは17世紀から18世紀まで主流を占めた佐倉城の平底系焙烙はどのように展開してきたのであろうか。江戸で中世平底系の瓦質焙烙から関西の影響を受けた丸底・粘土塊内耳をもつ土師質焙烙へ転換するのは17世紀の中葉であることは前にも述べたが、佐倉城では瓦質平底焙烙（Ⅰ類）から土師質の平底系焙烙（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類）へと材質転換が起こったのであろうか。

佐倉城では瓦質焙烙が1点しか出土していないのに対し、武蔵赤山城では瓦質と土師質の平底焙烙が半々に近い状態で出土しており、さらにこの傾向は上野や下野でも認められるようで〔青木・山本編, 1990〕、⁽⁶⁾下総に瓦質が少ないというのは地域差である可能性が高い。Ⅲ章では

土鍋形内耳土器から器高を減じ底径を増大させ、口唇部形態の特徴を残存しながらもⅡ・Ⅲ類へ変化した可能性を述べた。つまり土師質土鍋から土師質焙烙への転換説を示したわけで、そこには瓦質焙烙が介在する余地はない。図8—1の佐倉城から出土した土鍋を16世紀に比定されている下総屋代B遺跡の内耳土器(図2—1・2)と比較すると、器高はほぼ同じだが佐倉城の方が口径や底径がやや大きく、体部が外反する点は異なるものの、器面調整や内耳形態は非常によく似ていることがわかる〔根本, 1986〕。つまり佐倉城の土鍋は中世に浅い内耳土器といわれているものとかかなり近いことがわかる。つまり中世では佐倉城で土鍋としたものは焙烙形と呼んでもおかしくない部類に含まれるといえるのである。土鍋から焙烙形への移行が器高を減じ底径を増大させることで進んだと考えられている現在、この資料は近世焙烙の成立を語る上で重要な位置を占めているといえよう。

一方、16世紀以降の瓦質焙烙の変遷については辻論文が詳しい〔辻, 1988〕。辻は内耳の貼り付け位置の変化を根拠に型式変化を述べたが、この方向性は佐倉城で示したⅡ類からⅢ類への土師質焙烙と同じ変化であるにもかかわらず、佐倉ではほぼ1世紀遅れて変化していることがわかる。また体部形態をみると瓦質焙烙が一貫して直線的であるのに対し、土師質焙烙は湾曲して立ち上がる点などが異なっている。このように佐倉城の瓦質平底焙烙と土師質平底焙烙は年代や体部形態がかなり異なっているので別系統として考えたほうがよく、それが地域差としてあらわれたものと考えたほうがよいのではないだろうか。したがって佐倉では土鍋から土師質平底焙烙へ転換していったと考えたい。

また江戸の土師質焙烙の成立についてもふれておく。17世紀前葉の瓦質平底焙烙から17世紀中葉に土師質平底焙烙、そして土師質丸底焙烙への転換に関西系の技術が大いにかかわっているという。関西土鍋製作技術とは、瓦質でタタキを使った型づくりの底部と粘土紐積み上げでつくった体部とを接合して量産するものである。土師質丸底焙烙にみられる、別々の技法でつくった底板と体部を接合するという手法は関西系そのものだが、土師質丸底の焙烙にはタタキがみられず、また関西系が内型なのに対し、江戸のは外型という点も異なっている。また瓦質と土師質という点も異なる。江戸の焙烙に内耳がつくという点は、囲炉裏が主であった江戸では必要であったと考えられるのでまだうなづけるので外すとしても、そうなると底板と体部を接合するという手法のみが関西の技術体系から関東在来の技術体系に取り入れられたことになる。これをどう解釈すればよいのであろうか。関西系技術の導入があり御用職人も来ているのは確かだとしても、その数は少なく在地系の製作技術を一举に変革するほどの人数ではない。したがってあくまでも主体は中世以来の在地職人にあり彼らが型づくりという量産に適した技法を受け入れて土師質丸底の焙烙をつくりだしたと考えることもできよう。タタキ技法は受け入れていないのである。また瓦質から土師質へという動きも量産化にそったものであろう。さらに下総の土器づくり職人達が隅田川沿いの今戸周辺に入ったとする意見も、主体となった工

人の問題を考える上で興味深い。

Ⅱ類からⅢ類へと漸移的に変化してきた土師質平底系焙烙は、18世紀の中ごろになると製作技術に変化があらわれる。Ⅲ類からⅣ類への転換はとくに大きな画期として位置づけられるのである。内耳はガッチリした紐状へと変わり、貼り付けの際に体部を強く押しくぼめなくなるので内耳のつく部分の体部は外側に張り出さなくなる。色調は江戸市中にみられるような明るい色調のものへと変化して、胎土も混和材をほとんど含まなくなるとともに、還元帯がみられるようになる。型づくりが始まり底板に離れ砂を採用、内面全面をロクロナデで仕上げ、ケズリ技法も出現する。またロクロ水引きと思われる口唇部の造形など、中世以来の土師質土器作りが大きく転換したことをうかがわせる。

このような中世からくる土師質平底系焙烙の転換とちょうど時期を同じくして江戸市中の焙烙と同じものがみられるようになる。佐倉城のⅦ・Ⅷ類は形態的に東大構内E29—1の焙烙に近く(図1—13)、胎土や色調、成形技法等のより細かい比較検討が必要だが、ケズリが底板側に移動していることなどをみると江戸との整形技法の共通性もうかがえ、この背景には技術的な交流がはじまるかもしくは生産地が整理・統合された可能性も考えられる。18世紀の中・後葉まで中世平底系の技術をもつ工人達が存続していたかどうかはまだわからない。

佐倉の焙烙が江戸と共通してくる背景に竈の普及がある。佐倉城では竈が何度もつけ替えられた状況が18世紀中ごろから確認されはじめ、それ以前に竈の遺構は確認されていない。18世紀中ごろといえばそのあと明治2年までつづいた堀田氏の祖、堀田相模守正亮が出羽から入城する時期である(延享3年:1746)。この堀田の入城と竈の普及が関係あるのかわからないが、江戸に遅れること1世紀余りたった段階に譜代大名の堀田氏が入府し竈が武士の家まで普及したとすれば、焙烙も中世平底系のⅢ類からⅣ・Ⅴ類への転換が加速されたことは充分に考えられる。竈になったことによって火力が強まると熱効率をよくするための丸底も一層進んだであろうし、その結果、温度がかなりの高さまで上がる底部の縁の部分では、離れ砂が変質しヒビがはいって、いわゆるチヂレが生じたとも考えられる。しかし機能的には竈に適した丸底系の焙烙に転換したとしても内耳はⅣ類のような江戸にはない紐状内耳がしばらく継続したことは、これらの焙烙の生産が中世以来の系譜を引くこの地域の工人が、江戸の技術を受け入れておこなったことを示しているのではないだろうか。

19世紀に江戸市中で一般的になる大形の焙烙は佐倉城ではみられず、19世紀に属する焙烙は祭祀土坑から一括で出てきた図12の1・4・5・6だけである。これらは東大構内Y34—4出土の口径22cmの焙烙(図1—14)よりもさらに小形で、このように小さな焙烙の報告例はない。おそらく日常的な調理に使われたものではなく特定の場で用いられた特殊な機能を有する焙烙なのであろう。この焙烙の内面には「拾四文寛(?)」・「拾四文」の墨書があり、値段や重量を表示したものと推測されており、いずこかで購入されてきたものであろう。今後の類

例の増加に注目したい。19世紀の佐倉城で一般的な焙烙がどのようなものだったかわからない。明治6年の佐倉連隊創設にともなって屋敷が廃絶された際、住居跡の中に焙烙が多数打ち捨てられた状態で廃棄された状況が報告されているが、どのような焙烙だったか特定できないのが残念である。

5. おわりに

以上、佐倉城出土の焙烙の時期をはっきりと特定できないにもかかわらず、大いに推測を混じえて、江戸との比較をして近世における土もの生産の一端を素描してきた。関西系技術の導入と、竈の急速な普及を背景に中世平底焙烙から丸底焙烙への転換をはかっていった江戸とは対照的に、江戸より100年もあとまで中世平底系の焙烙が主体的に発展してきた佐倉城との地域差を明らかにしてきた。おそらく関東では佐倉のようなあり方が一般的で、むしろ江戸市の方が特殊であったのではないかと考えているが、今後、佐倉のようなあり方をどの程度地理的に普遍化できるのかが課題となる。また名古屋では江戸時代を通して鍋型の丸底の内耳土器が継続するので、煮沸具にみる関東・東海・近畿といった中世以来のさらに大きな地域差についても今後追求していかなければならないし、中世以来の土鍋にみられる地域差が近世にどのように変化していくのかも前近代の生産と流通を考えるうえでも大きな問題となってくるであろう。今回は、佐倉城の地域差を浮き彫りにすることを主目的に焙烙を選んだが、佐倉藩の武士階級のあり方が下総の地域性といえるのかどうかは、さらに手続きを必要とするため、今回の結果が江戸と下総の地域性とはまだいえない。焙烙だけではなく同じ土ものの火鉢類や、広域流通する焼塩壺、播鉢などを題材に佐倉城ならびに下総の地域性を今後も論じていく所存である。

最後に本稿を草するにあたり数多くの便宜をはかっていただいた佐倉城研究会のメンバーや、発掘調査の内容を教えていただいた国立歴史民俗博物館考古研究部の阿部義平氏、中世から近世にかけての土器研究の立場から多くの面にわたってご教示いただいた同小野正敏氏には大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

註

- (1) 14・15世紀に成立する中世の内耳土器は関東・甲信・東海地域に主体的に分布する。器形から鍋形と焙烙形に大きくわかれ、その違いは器高の違いだけではなく口縁部と体部が明確に分かれる鍋形と分かれぬ焙烙形という分類も示されている〔中村, 1979〕。焙烙を対象にした中世からの系譜論は器形と耳の変化に重点をおいた議論のため、製作技法の変化が検討されている鍋形の内耳土器に比べて製作技法は依然として不十分といわざるを得ない。下総の内耳土器には、他地域と共通する平底で口縁部が大きく外反する内耳鍋の他に播鉢形の内耳鍋があると指摘されている〔足立, 1987〕。そして播鉢形の内耳土器には酸化焰焼成のものもあるという。佐倉城の焙烙を研究するに際してこの地域の中

世内耳土器の動向には今後注意を払っていく必要がある。

- (2) 17世紀中葉以降に出てくる土師質の丸底焙烙の製作には、長佐古の想定図にみるように底の造形に丸くくぼんだ型の存在が考えられているが、江戸近郊に分布する17・18世紀の土師質平底系焙烙の底部にみられる圧痕は、平坦なロクロの上に離れをよくするために直接敷かれていた敷物の痕跡の可能性がある。東大構内遺跡の報告にも簾状のものとしていた焙烙があるが、小野正敏氏は佐倉城出土の焙烙の中に粗くうきでた板目様の痕跡をもつものがあるという。さらに蹴りロクロのほぞ穴と思われる痕跡も見られるという教示も受けている。したがって「型づくり」という場合には平底を除く底部形態の焙烙に限定した方がよいのではないかと考える。
- (3) 阿部義平氏教示
- (4) 小野正敏氏教示
- (5) (3)に同じ
- (6) 文献の入手には國學院大学の小林青樹氏のお世話になった。

参考文献

- 青木豊・山本典幸, 1990:『旧谷中村遺跡学術調査報告書』旧谷中村遺跡学術調査団。
- 足立順司, 1987:「内耳鍋の研究」(『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』Ⅱ, 19—44)。
- 入山恵一, 1970:「焙烙・土鍋類」(『文京区白山四丁目遺跡』白山四丁目遺跡調査会)。
- 宇田川洋, 1976:「ほうろく・内耳土器」(『青戸・葛西城址Ⅱ区調査報告 東京都葛飾区・青戸』葛西城址調査会)。
- 大橋康二, 1980:「中世以降の土器生産に関する一考察」(『考古学の世界』2, 2—45, 学習院考古会)。
- 落合則子, 1989:「江戸今戸焼き史に関する一試論—江戸窯業変遷史における位置づけ—」(『生活文化史』15)。
- 金箱文男, 1989:『赤山』川口市遺跡調査会。
- 神崎宣武, 1982:『日本人の生活と文化4—暮らしの中の焼きもの—』日本観光文化研究所。
- 小林謙一, 1988:「江戸在地系土器研究の現状と課題—麻布台一丁目遺跡出土の瓦質・土師質土器の整理から—」(『江戸在地系土器勉強会通信(仮称)』2—3)。
- 小林謙一・菅沼圭介・両角まり, 1986:「瓦器・土師質土器の編年」(『麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡』272—275, 港区麻布台一丁目遺跡調査会)。
- 佐々木彰, 1990 a:「近世江戸のカワラケと焙烙について」(『江戸在地系土器研究会通信』16, 5—11)。
- 1990 b:「近世焙烙の研究—大聖寺藩上屋敷跡出土資料を中心に—」(『物質文化』53, 33—57)。
- 嶋谷和彦, 1984:「SKT14地点」(『堺環濠都市遺跡発掘調査報告書—宿院町東4丁目 SKT14地点・調御寺跡—』堺市文化財調査報告20)。
- 新宿区教育委員会, 1988:『三栄町遺跡』。
- 辻 真人, 1988:「焙烙の変遷」(『江戸の食文化』21—26, 江戸遺跡研究会)。
- 1989:「民俗例にみる焙烙」(『江戸在地系土器勉強会通信(仮称)』6, 3—6)。
- 寺島孝一編, 1990:『東京大学構内の遺跡—山上会館・御殿下記念館地点第2分冊 御殿下記念館地点の調査』東京大学遺跡調査発掘調査報告書4。
- 中村倉司, 1979:「内耳土器の編年とその問題」(『土曜考古』創刊号, 15—24)。
- 根本康弘, 1986:『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13—屋代B遺跡Ⅰ—』茨城県教育財団文化財調査報告書33。
- 羽生淳子編, 1989:『東京大学構内の遺跡—理学部7号館地点』東京大学遺跡調査発掘調査報告書1。
- 渡辺ますみ, 1989:「東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点出土の17世紀代の焙烙・土鍋類」(『江戸在地系土器勉強会通信』8, 8—14)。

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)

Sakura and Edo
—Local Features from the Viewpoint of Tile-type and
Unglazed Potteries in the Early Modern Period—

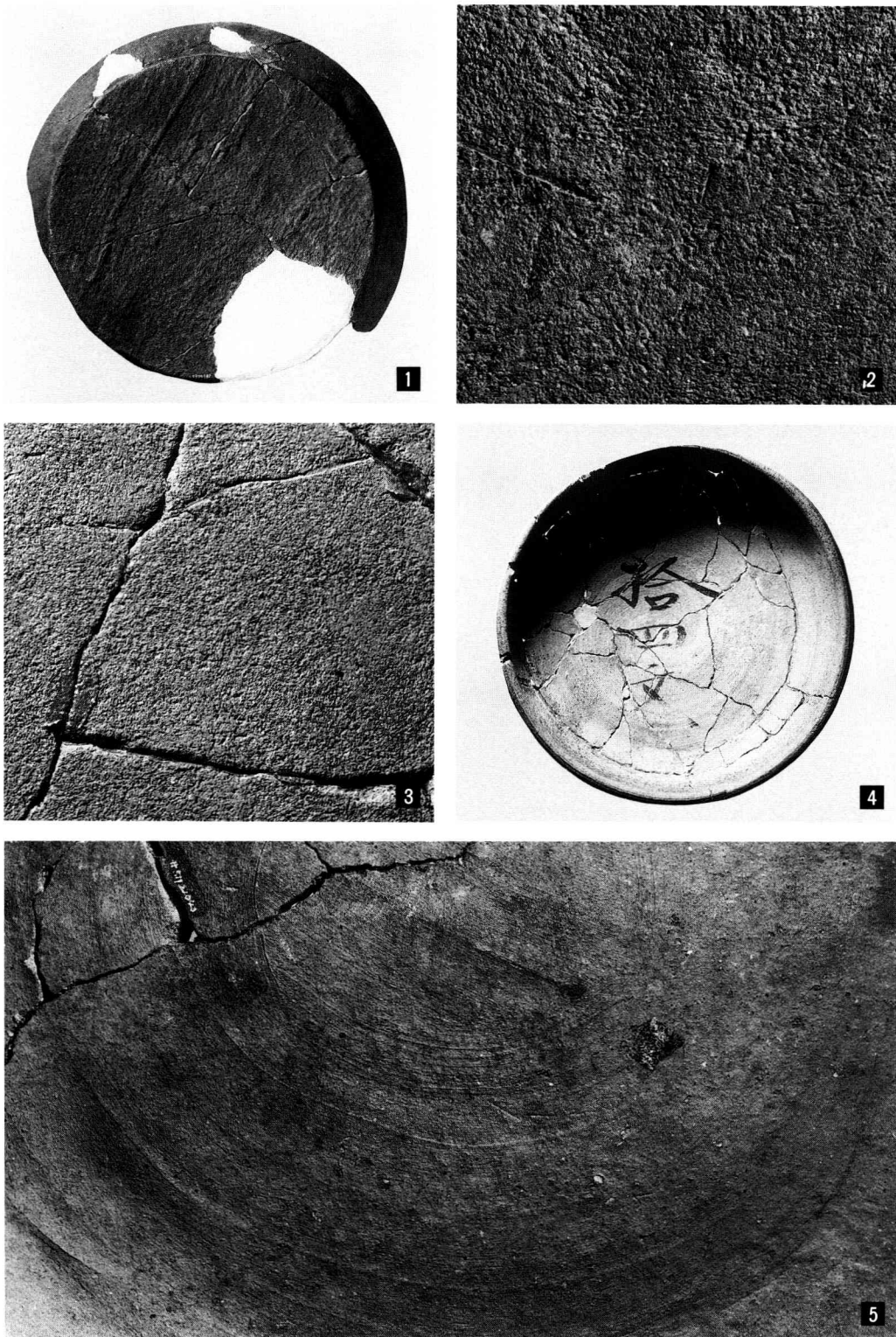
FUJIO Shinichiro

A Full picture of Edo from the viewpoint of archaeology has been gradually clarified, thanks to the excavations conducted mainly in the center of the city. In particular, reconstruction of the common people's lives, and a comparative study of the samurai (warriors) and common people, have become widespread by means of pottery. The pottery of the Edo period is classified into ceramics, which were extensively distributed over a large area, and tile-type and unglazed potteries, which was produced in various localities. Pottery to be selected as material for historical study depends on the subject. In this study, "Horoku", or plate-type earthenware for parching sesame seeds or beans, was used to investigate the difference in the level of daily life between Edo, which was the largest consumer city in the Edo period, and the castle town of Fudai-Daimyo (daikyo in hereditary vassalage to the Tokugawas) located near Edo. Since the bottom of Horoku was so thinly made, it is thought that they were not fit for transportation, and that they were produced in various localities, with very small trading areas. Therefore, by investigating local colors seen with the Horoku, it is possible to know the extent of its trading area. Also, as it is estimated that Horoku was manufactured to meet the level of local life and cooking facilities such as hearth and furnace, it may be effective as material to investigate the actual living conditions in various localities of the period.

Analysis has shown that the shift from hearth to furnace was considerably delayed in Sakura, when compared with the city of Edo. It was also found that there were Kansai workers who had been reportedly invited from the Kansai district in the 17th century, together with workers who had lived in and around Edo since the Medieval Age, and they were competing each other to meet the needs of consumers. The local workers, who surpassed the Kansai workers in number, were responsible for the greater part of production in Sakura. Their relationship with the historical potters' group in the Shimousa Area deserves special attention. The

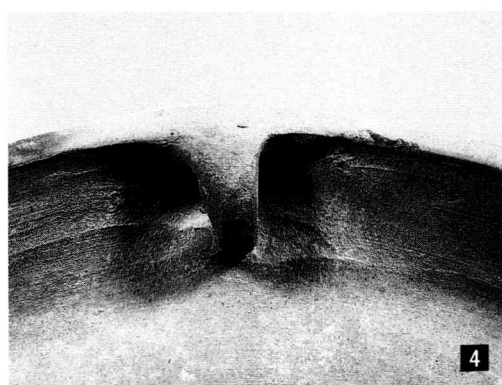
regional differences seen in the boiling utensils of the Edo period reflect the living conditions of the time. This is a very hopeful theme of study with some relationship to the living conditions of the Jomon and Yayoi periods, in which I specialize.

図版 1



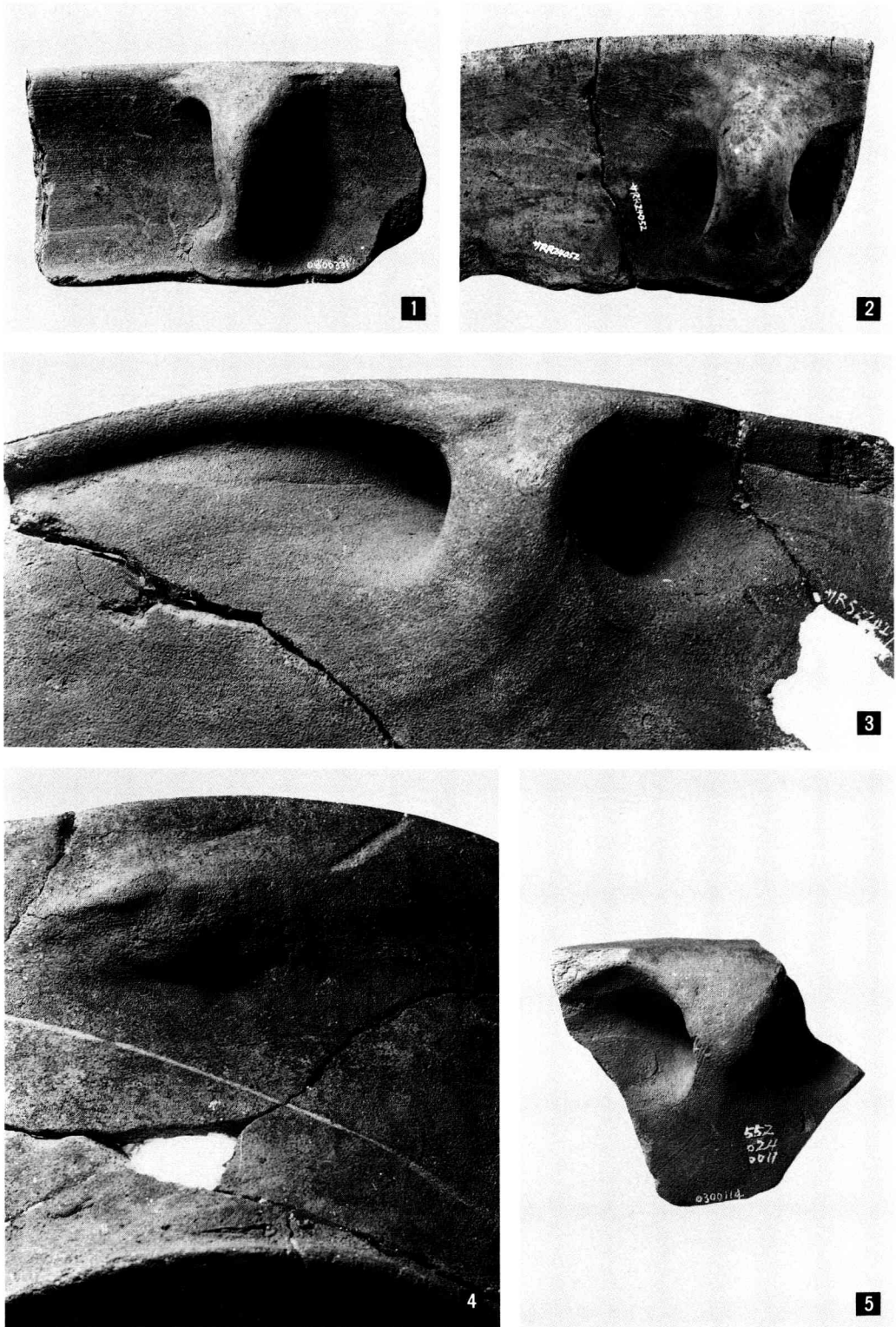
1 離れ砂の諸例(1) 簾状の敷物痕 2 同(2) 粗い砂痕 3 同(3) 細かい砂痕 4 内面全面ロクロナデ仕上げ
5 底部中央を不整方向のナデ、内面外周部をロクロナデ仕上げ

図版 2

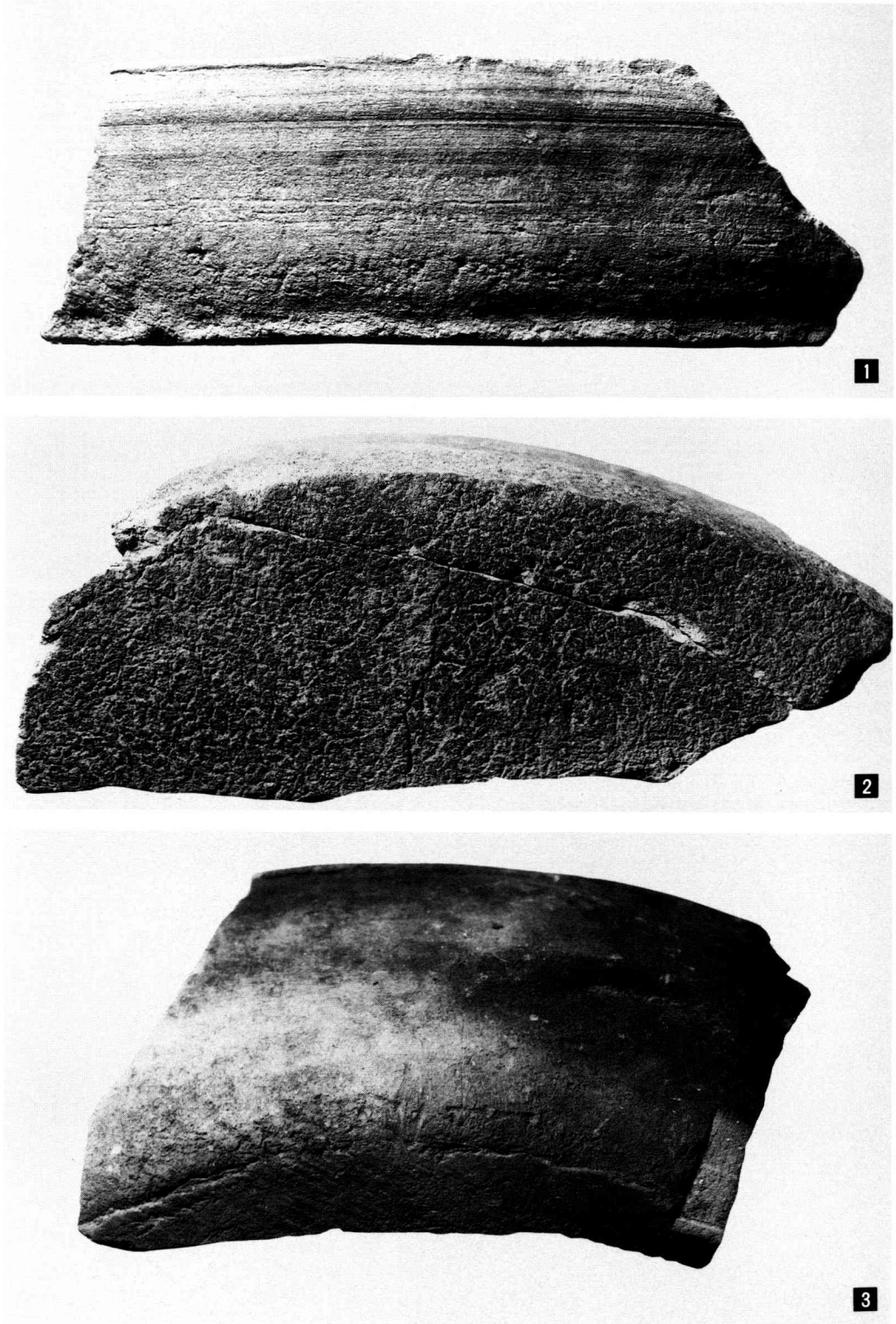


1 体部外面調整(1) 回転台利用のヨコナデ 2 同(2) ロクロナデとケズリ 3 内耳 A 紐状内耳
4 内耳 B 紐状内耳

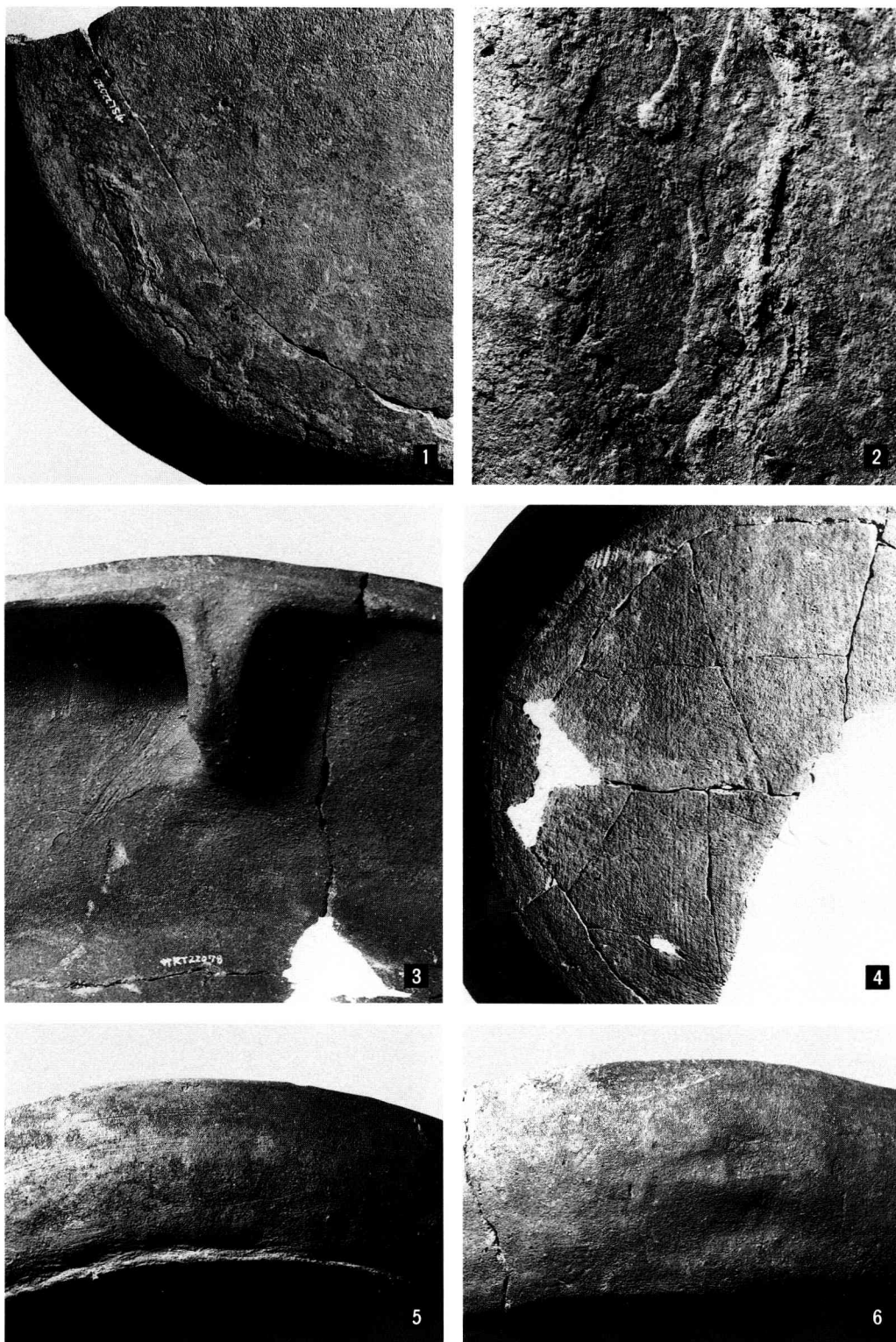
図版 3



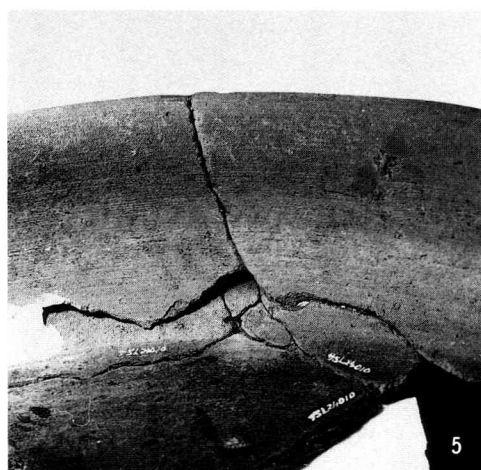
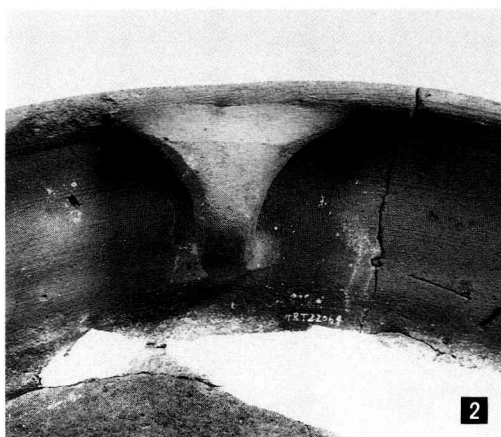
1 内耳D 紐状内耳 2 内耳E 粘土塊内耳 3 土鍋の内耳 4 土鍋の内耳外面 5 管理棟敷地内出土土鍋



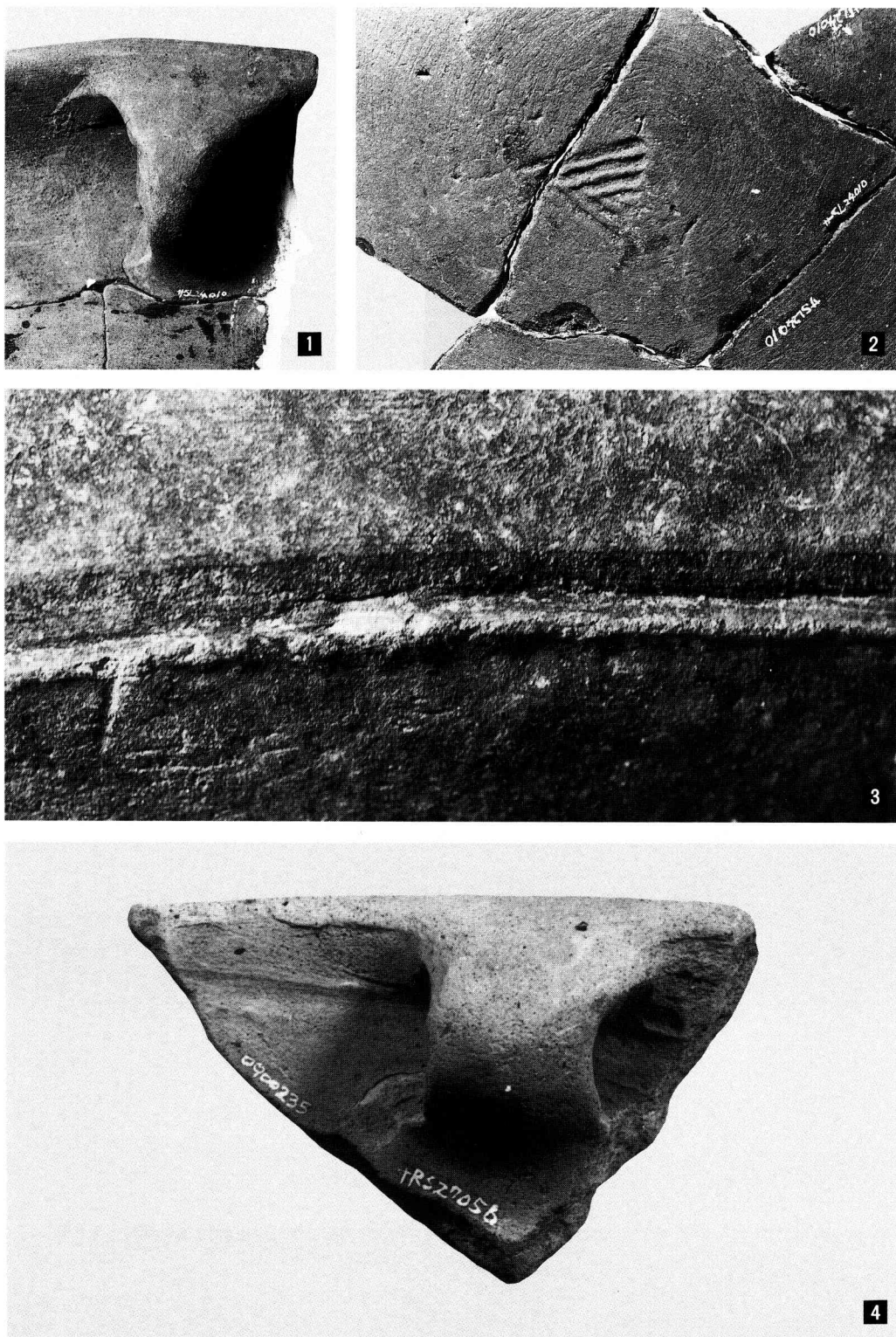
1 焙烙Ⅰ類(瓦質平底)体部外面のロクロナデ調整 2 同 底部の粗面 3 焙烙ⅡA類 底部の粘土帯接合線



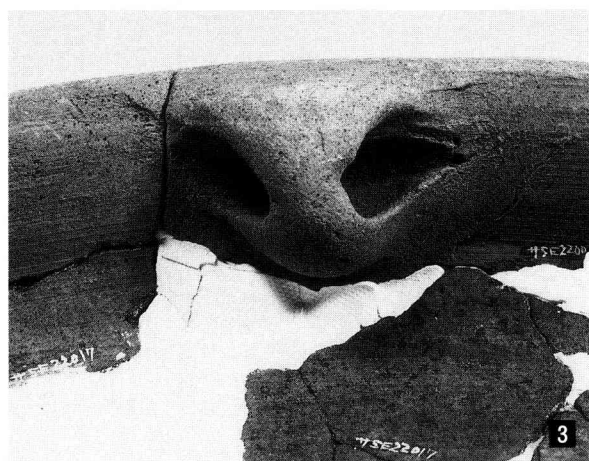
1 焙烙ⅡB類 底部 2 同 粘土帯接合部の拡大 3 同 内耳A 4 同 底部の簾状の敷物痕
5 焙烙ⅢA類体部下半 6 焙烙ⅢB類 胎土に金雲母を多く含む例



1 焙烙ⅢB類 底部の簾状の敷物痕 2 焙烙ⅣA類 内耳C 3 同 底部の粗い砂痕
4 同 体部の外面調整 5 焙烙ⅣB類 体部と底部の接合線

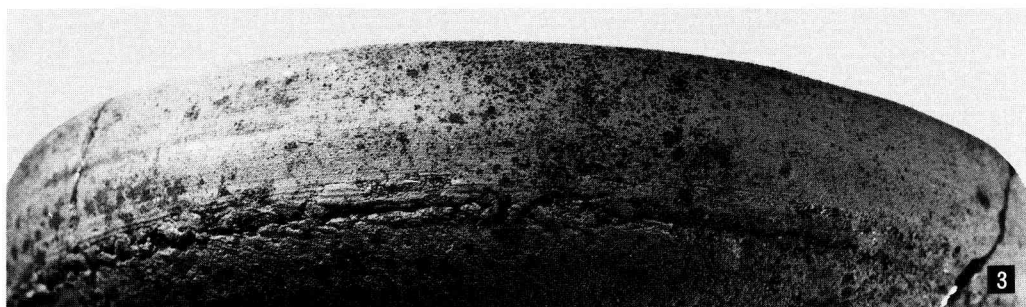


1 焙烙ⅣB類 内耳D 2 同 内面調整と刻印 3 焙烙ⅣC類 体部外面のへう調整 4 同 内耳B



1 焙烙Ⅴ類 底部のチヂレ 2 同 内耳E（棒） 3 同 内面調整と内耳E（指） 4 焙烙ⅥA類
5 焙烙ⅥB類

図版 9



1 焙烙Ⅶ類 外面調整（ロクロナデとチヂレ） 2 焙烙Ⅷ類 底部の細かい砂痕
3 焙烙Ⅹ類 外面のチヂレ 4 同 底部の砂痕 5 同 内面調整 6 同 体部外面の隆帯